

令和2年度

文部科学省委託事業

多様性への対応に関する調査研究事業

スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーと協働し、
個々の生徒の学習ニーズに応じた指導方法の確立

～社会でより良く生きていく力をつけるために～

〈 3 年 次 〉

報 告 書

令和3年3月

京都市立西京高等学校 定時制

はじめに

近年の定時制高校は、不登校経験のある生徒や様々な『困り』から個別の支援を要する生徒などが多く入学しています。本校においても、平成25年度より長期欠席者特別入学者選抜を実施し積極的に不登校経験者を受け入れているため、入学生における不登校経験者の割合はここ数年60～70%に達しています。生徒アンケートではおよそ7割の生徒が読み書きや聞き取り、落ち着いて取り組むこと、または感情のコントロール等、何らかの『困り』を感じていると回答しています。発達障がい等の診断や、疑いのある生徒、様々な家庭環境から児童相談所の見守り対象になっている生徒など、生徒の『困り』は多岐にわたっています。

そのような生徒に社会の一員として生きていく力をつけるために、本校では平成28年度から2年間、「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」の一環として、スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーと協働し、個々の生徒のニーズに応じた支援を可能にする校内体制作りという研究の中で、様々な『困り』を抱えた生徒に対する支援方法の確立及び校内体制の構築に取り組んでまいりました。

平成30年度からは「高等学校における次世代の学習ニーズを踏まえた指導の充実事業」として、個々の生徒の学習ニーズに応じた指導方法の確立はもとより、より具体的なテーマを設定して研究を進めてまいりました。昨年度より実施している「授業のチェックリスト」や「自己目標マップ」に加え、本年度さらに「My Guidepost」を作成し、生徒自身に学習成果の振り返りをさせる取組を行いました。

教職員の負担感がないわけではありませんが、生徒の成長が教職員の達成感につながっていくものと考えております。また、京都市では、様々な『困り』を抱えながらも「学習支援」や「学び直し」を求めている生徒を対象に、この4月に「京都奏和高等学校」を定時制単独校として開校いたします。本校での様々な取組が「京都奏和高等学校」に受け継がれ、生かされることを確信しています。

ここに3年間の集大成として本年度の取組を報告書としてまとめました。本研究は3年間をもって一端の区切りといたしますが、決して完成されたものではなく、まだまだ発展途上のものと考えております。今後、さらに精度を高めるためにも皆様の忌憚のないご意見、ご指導をお願いいたします。

目 次

はじめに

I	学校の概要	3
1.	学校の基本情報	3
2.	学校の特色	6
3.	学校の現状と課題	6
II	調査研究の概要	8
1.	調査研究課題名	8
2.	調査研究のねらい	8
3.	調査研究の内容	8
4.	調査研究の校内組織	10
III	調査研究の報告	11
1.	調査研究の目的及び目標	11
2.	調査研究の取組及び成果	12
IV	調査研究の成果（まとめ）	40
1.	目標1「学習態勢確立のための支援方法及び 支援体制の具体的策定」に対する成果	40
2.	目標2「学習指導方法と評価方法の確立」 に対する成果	43
3.	目標3「支援を支える教職員の知識・理解の深化」 に対する成果	44
4.	調査研究の評価基準となる指標による評価	45
5.	おわりに	63
資料1	個別の指導計画 プロフィールシート	65
資料2	個別の指導計画1	68
資料3	個別の指導計画2	69
資料4	幸せの一番星シート	70
資料5	授業のチェックリスト	71
資料6	学習状況のチェック表	72
資料7	My Guidepost	73
資料8	自己目標マップ	74

I 学校の概要

1. 学校の基本情報

京都市立西京高等学校 定時制課程

設置学科：普通科（AコースとBコースを設置）

住所：京都市中京区西ノ京東中合町1 ※ 全日制課程との併置校

※ Aコース：普通科目の充実を図り，選択科目を多く配置することにより，発展的な興味や将来の進路の実現を積極的に支援するコース。

Bコース：普通科目の学習のほかに，情報処理や簿記などの商業科目を重点的に学習し，資格取得も可能にするなど実社会に即応できる力を養うと共に個性や向上心の伸長を積極的に支援するコース。

(1) 沿革

昭和10年10月	専修商業学校	(高小卒，4年制)
昭和13年4月	夜間商業学校	(//)
昭和16年4月	京都市立第一商業学校第二本科	(//)
昭和23年4月1日	京都市立御池商業高等学校	(新制中学卒，4年制)
昭和23年10月31日	京都市立西京高等学校定時制課程	(//)
昭和38年4月1日	京都市立西京商業高等学校定時制課程	(//)
平成15年4月1日	京都市立西京高等学校定時制課程	(3年制，4年制)

(2) 教職員数

職名	校長	副校長	事務長	教諭	常勤講師	養護教諭	非常勤講師	実習助手	専門主事	事務職員	S C	S W	S C	総合育成支援員	管理 用務員	A L T	夜間 警備員	警備 用務員	校医	歯科 医	耳鼻 咽喉科 医	眼科 医	薬剤 師
人数	1	1	1	25	2	1	8	1	1	6	1	1	1	3	1	1	1	2	1	1	1	1	1

※ 専門主事：総合育成支援教育に関するアドバイザーとして勤務

SC：スクールカウンセラー，SSW：スクールソーシャルワーカー

SCC：スクールキャリアコンサルタント，ALT：アシスタントランゲージティーチャー

(3) 在籍生徒数

令和2年5月1日現在

	1組			2組			3組			合計		
	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計
1年	7	7	14	8	8	16	8	8	16	23	23	46
2年	9	6	15	8	8	16	7	8	15	24	22	46
3年	6	13	19	6	4	10	8	3	11	20	20	40
合計										67	65	132

(4) 教育課程表 平成31年度入学生（令和2年度 第2学年）用

Aコース

第 1 学 年		第 2 学 年		第 3 学 年		第 4 学 年	
1	国語総合 3	国語総合 2	現代文 B 2	現代文 B 2	現代文 B 2	現代文 B 2	
2		現代文 B 2					現代文 B 2
3	現代社会 3	世界史 B 3	数学 B 2	数学 B 2	家庭総合 2	家庭総合 2	
4							現代社会 3
5	数学 I 3	数学 A 3	化学基礎 2	化学基礎 2	化学基礎 2	化学基礎 2	
6							現代社会 3
7	生物基礎 2	地学基礎 2	体育 2	体育 2	体育 2	体育 2	
8							数学 I 3
9	体育 3	体育 2	コミュニケーション英語 II 3	コミュニケーション英語 II 3	コミュニケーション英語 II 3	コミュニケーション英語 II 3	
10							生物基礎 2
11	保健 1	保健 1	家庭総合 2	家庭総合 2	家庭総合 2	家庭総合 2	
12							体育 3
13	美術 I 2	コミュニケーション英語 I 3	国語表現の基礎 2	国語表現の基礎 2	国語表現の基礎 2	国語表現の基礎 2	
14							保健 1
15	書道 I 2	コミュニケーション英語 I 3	国語表現の基礎 2	国語表現の基礎 2	国語表現の基礎 2	国語表現の基礎 2	
16							美術 I 2
17	コミュニケーション英語基礎 3	家庭総合 2	政治・経済 I 2	政治・経済 I 2	政治・経済 I 2	政治・経済 I 2	
18							保健 1
19	社会と情報 3	古典 A CALL演習ビジネス経済 2	物理基礎演習英語演習経済活動と法 2	物理基礎演習英語演習経済活動と法 2	物理基礎演習英語演習経済活動と法 2	物理基礎演習英語演習経済活動と法 2	
20							コミュニケーション英語基礎 3
21	総合基礎 1	美術 II 書道 II 情報処理 2	美術演習情報デザイン 2	美術演習情報デザイン 2	美術演習情報デザイン 2	美術演習情報デザイン 2	
22							社会と情報 3
23	◎生活基礎 1	総合進路 1	総合探求 1	総合探求 1	総合探求 1	総合探求 1	
24							総合基礎 1
25	特別活動	◎生活活用 1	◎生活応用 1	◎生活応用 1	◎生活応用 1	◎生活応用 1	
26							◎生活基礎 1
27		特別活動	特別活動	特別活動	特別活動	特別活動	

◎ は、自立活動を目的とした科目で、必要に応じて履修することができる。

網掛け は、4修制を選択した場合の、第4学年での履修科目。

Bコース

第 1 学 年		第 2 学 年		第 3 学 年		第 4 学 年	
1	国語総合 3	国語総合 2	現代文 B 2	現代文 B 2	現代文 B 2	現代文 B 2	
2		現代文 B 2					〔日本史 A 地理 A〕 2
3	現代社会 3		世界史 A 2	科学と人間生活 2	保 健 1		
4		現代社会 3				世界史 A 2	科学と人間生活 2
5	現代社会 3		世界史 A 2	科学と人間生活 2	家庭総合 2		
6		現代社会 3				世界史 A 2	科学と人間生活 2
7	現代社会 3		世界史 A 2	科学と人間生活 2	家庭総合 2		
8		現代社会 3				世界史 A 2	科学と人間生活 2
9	現代社会 3		世界史 A 2	科学と人間生活 2	家庭総合 2		
10		現代社会 3				世界史 A 2	科学と人間生活 2
11	現代社会 3		世界史 A 2	科学と人間生活 2	家庭総合 2		
12		現代社会 3				世界史 A 2	科学と人間生活 2
13	現代社会 3		世界史 A 2	科学と人間生活 2	家庭総合 2		
14		現代社会 3				世界史 A 2	科学と人間生活 2
15	現代社会 3		世界史 A 2	科学と人間生活 2	家庭総合 2		
16		現代社会 3				世界史 A 2	科学と人間生活 2
17	現代社会 3		世界史 A 2	科学と人間生活 2	家庭総合 2		
18		現代社会 3				世界史 A 2	科学と人間生活 2
19	現代社会 3		世界史 A 2	科学と人間生活 2	家庭総合 2		
20		現代社会 3				世界史 A 2	科学と人間生活 2
21	現代社会 3		世界史 A 2	科学と人間生活 2	家庭総合 2		
22		現代社会 3				世界史 A 2	科学と人間生活 2
23	現代社会 3		世界史 A 2	科学と人間生活 2	家庭総合 2		
24		現代社会 3				世界史 A 2	科学と人間生活 2
25	現代社会 3		世界史 A 2	科学と人間生活 2	家庭総合 2		
26		現代社会 3				世界史 A 2	科学と人間生活 2
27	現代社会 3		世界史 A 2	科学と人間生活 2	家庭総合 2		
		数学 I 3				数 学 A 3	体 育 2
	生物基礎 2	体 育 2	コミュニケーション 英 語 I 2	〔政治・経済 工芸 I フードデザイン〕 2			
	体育 3	保 健 1	家庭総合 2		総合進路 1		
	保健 1	保 健 1	家庭総合 2	特別活動			
	〔美術 I 書道 I〕 2	コミュニケーション 英 語 I 3	経済活動と法 3		特別活動		
		簿 記 3	簿 記 3	情報処理 2			
	コミュニケーション 英 語 基礎 3	簿 記 3	簿 記 3	情報処理 2			
	社会と情報 3	情報処理 2	〔国語表現 倫理の基礎〕 2	2			
		〔地学基礎 CALL演習 ビジネス経済〕 2			〔政治・経済 工芸 I フードデザイン〕 2	2	
	総合基礎 1	〔地学基礎 CALL演習 ビジネス経済〕 2	〔政治・経済 工芸 I フードデザイン〕 2	2			
	◎生活基礎 1	総合進路 1			総合探求 1	1	
	特別活動	◎生活活用 1	◎生活応用 1	1			
		特別活動	特別活動	特別活動			

◎ は、自立活動を目的とした科目で、必要に応じて履修することができる。

網掛け は、4 修制を選択した場合の、第 4 学年での履修科目。

2. 学校の特徴

西京高校は京都市西部に位置し、京都市営地下鉄西大路御池駅前に立地する。交通の便が良いことから、地下鉄沿線の京都市東南部や東部の醍醐・山科方面、私鉄阪急京都線沿線の向日市・長岡京市方面、JR嵯峨野線沿線の亀岡市・南丹市方面など、京都市中心部以外にも広い地域から生徒が通っている。

京都市内の定時制高校で唯一、長期欠席者を対象とした選抜試験を実施している。また、単位制に移行する定時制高校が多い中、学年制による教育課程を展開している。

(1) 3年間で卒業できる教育課程

4年で卒業する教育課程（4修制）だけでなく、3年で卒業できる教育課程（3修制）も設定している。平成29年度以降は、在籍した生徒全員が3修制を選択している。「午後から始まる高校」として始業時間を少し早め、1日の授業時間は午後4時20分からの5時限を基本とし、2年生からはさらに早い午後3時30分から6時限授業を行う日が週1日ある。

(2) 少人数によるクラス・講座編成

1クラスの人数や授業講座の人数を20名以下の少人数で編成している。教員にとっては生徒一人一人にきめ細かい指導ができ、生徒にとっては疑問点や不明点について気軽に質問ができるアットホームな雰囲気での授業が展開されている。数学や英語などの授業の一部及び情報関連の授業ではティームティーチングを実施している。

(3) 定時制専用教室

定時制課程は全日制課程とは別に単独のエリアを有しており、ホームルーム教室をはじめ単独で使用できる教室を有している。そのため、「自分の机・自分の教室」があり、いつでも自由に学習に取り組むことができる。学習が苦手な生徒に対しての補習、進路目標に向けての補習や生徒の自主学習に積極的に活用している。

(4) 2年生からのコース選択

コース制を採用しており、2年生からAコースまたはBコースを選択する。進学から就職まで生徒の進路希望や興味関心に応じて幅広く学習をすることができる。特にBコースでは簿記や情報関係の資格取得にも取り組んでいる。

3. 学校の現状と課題

(1) 近年の定時制高校に期待される役割の変化

定時制高校は、従来の勤労青少年に対する学習の場としての役割だけでなく、不登校経験のある生徒や特別な支援を要する生徒の増加に伴い、多様な学びの動機や学習歴を有する生徒の学習保障の場として重要な役割を担うなど、その役割が大きく変化している。

(2) 京都市立高校における、定時制課程在籍生徒の状況

中学校在学時の不登校経験者の割合は65%～70%に達する。また、発達障がいや発達遅滞の診断を受けている生徒及びその疑いがあると思われる生徒の割合は25%近くを占め、その他様々な環境等に伴う『困り』を抱える生徒が増加している。

中途退学率、原級留置率はいずれも10%程度で推移しており、多様化する生徒たちのニーズにきめ細かく対応することが急務となっている。

(3) 西京高校定時制の現状

募集定員の5分の1程度を中学時に年間30日以上欠席がある生徒を対象とした「長期欠席者特別入学者選抜」で合格させており、一般の選抜合格者も含めて在校生に占める不登校経験生徒の割合は60%近くに上る。在校生のうち、生活保護家庭、児童相談所の見守り、発達障がいの診断や疑い、ひとり親家庭など、『困り』を抱えた生徒が約80%に上るのが現状である。

生徒の『困り』を解消・軽減するため、平成28年度から「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」の調査研究において、スクールカウンセラー（以下、「SC」という。）及びスクールソーシャルワーカー（以下、「SSW」という。）と協働し、個々の生徒のニーズに応じた支援を可能にする校内体制作りに関して調査研究に取り組んできた。2年間の研究で一定の校内体制の形は見えてきてはいるが、より実効を伴う支援を行っていくためには、さらなる研究が必要である。

しかし、校内体制が整い、適切な時期に適切な支援を行うことで環境や特性に関する『困り』が解消に向かっても、学力不振から脱却できずに中途退学や原級留置となる生徒が無くなるわけではない。そうした生徒が進級・卒業していくためには、個々の状況に応じた学習指導が必要となり、あわせて学習目標の達成度合いを評価する評価方法の改善または新規の作成が必要となる。

(4) 西京高校定時制が抱えている主な課題

発達障がいがある生徒について、特性を踏まえた学習指導が組織立って構築できていない。また、小学校・中学校で不登校があった場合の未学習内容についての学習指導についても教員個々の対応となっており組織的な方策が作れていない。

外国人生徒の数は少ないが、ごく短期間の中学校在学（日本滞在）を経て入学してくるケースが生じており、日本語能力の問題など、その学習指導に苦慮する場面も生じている。

II 調査研究の概要

1. 調査研究課題名

スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーと協働し、
個々の生徒の学習ニーズに応じた指導方法の確立
～社会でより良く生きていく力をつけるために～

2. 調査研究のねらい

不登校経験生徒、発達障がい等の診断を受けている生徒や診断は受けていないが疑いのある生徒、生活保護の対象家庭の生徒や児童相談所の見守り対象になっている生徒などの、特性や環境に関する何らかの『困り』を抱えた生徒の中には、学力不振を理由として中途退学や転学、原級留置となる生徒が少なくない。また、日本語によるコミュニケーション力が十分身につかないまま入学してくる外国人生徒に対しても、日本語運用能力の向上と並行して高等学校の学習内容に対応させる必要があるケースも生じている。

『困り』のあるこれらの生徒を、多様な学習ニーズを持つ生徒と位置づけて焦点化し、確かな学力を身につけて社会で生きていく力をつけるための学習指導方法の開発を目標として調査研究に取り組んだ。

研究調査3年目、最終年度となる本年度も、次の2つをねらいとして設定し、学習態勢確立のための支援方法及び支援体制を策定したのち、その体制のもとで学習指導方法ならびに評価方法を確立していくための調査研究を行った。

(1) 学習態勢確立のための支援方法及び支援体制の具体的策定

SCやSSWと協働しながら支援する校内体制の充実に伴って、生徒の『困り』に対するアセスメントと対処の精度を高めて『困り』を解消する支援方法を確立することで、学習態勢を整える。

(2) 学習指導方法と評価方法の確立とその実施のための校内体制構築

発達障がいがある生徒や不登校経験のある生徒など、多様な学習ニーズに即した学習指導方法と評価方法の確立及びその実施のための校内体制を構築する。

3. 調査研究の内容

生徒の『困り』を解消・軽減するため、平成28年度から「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」の委託を受けて2年間行ってきた調査研究を、「生徒の学習態勢確立のためにSCやSSWと協働しながら支援する校内体制の構築」として拡張した上で、その成果を踏まえて多様な学習ニーズに応じた学習指導方法を確立するために、以下の項目について本年度も引き続き調査研究を行う。

(1) 学習態勢確立のための支援方法及び支援体制の策定

- (a) SC及びSSWとの協働体制のもとで、生徒情報の機能的な収集・管理・共有・活用と効果的なケース会議の開催を通して、生徒のアセスメント機能を強化し、学習態勢確立に向けた支援等につなげる。
- (b) ソーシャルスキルトレーニング（以下、「SST」という）の具体的な実施方法について確立する。

(2) 学習指導方法と評価方法の確立とその実施のための校内体制構築

- (c) 発達障がいや要因とする学力不振への対処法や、そのような生徒の学習指導方法及び評価方法について確立する。
- (d) 不登校を経験した生徒の未学習への対処法や、そのような生徒の学習指導方法及び評価方法について確立する。
- (e) 日本語運用能力が不足している外国人生徒に対して(c)(d)の学習指導方法及び評価方法を応用することを研究する。

(3) 教職員の知識・理解の深化

- (f) 平成28年度から2年間の調査研究にともなって培われた教職員の知識をより深化させながら、新たな課題についての基礎的知識等を養う場として教職員の研修を実施するとともに、先進校の視察等による事例研究を行う。

(4) 校内体制を確立するための人材育成

- (g) 校内体制を確立するために次のような人材の育成が必要と考える。
 - ・ 発達障がいがある生徒や不登校を経験した生徒、外国人生徒の学習指導を校内で円滑に行うため、主導的立場で取りまとめる人材。
 - ・ SC及びSSWを校内の一員として協働する意識と支援に対する知識や考え方を持った教職員。
 - ・ 教職員と共に『困り』の解消に取り組めるSCやSSW。
 - ・ 「ケース会議」を円滑に進行させるために教職員とSC及びSSWの信頼関係を構築し、SCやSSWを校内で有効に機能させる「支援コーディネーター」。
- ※「支援コーディネーター」とは、特別支援教育コーディネーター（京都市での呼称は総合育成支援教育主任）の役割を担う担当者の校内での呼称。本研究においては、その本来定義にとどまらず校内での生徒支援を主導する役職と位置付け、昨年度までの研究成果として「支援コーディネーター」と呼称することとして以下のように定義した。
 - 特別支援教育コーディネーターとしての本来の役割にとらわれずに、生徒に対して直接支援を行う教職員（クラス担任や教科担当等）の活動を、校内の各分掌や教職員（SC・SSWという専門職を含む）と協働しながら多面的に支え、調整する者として位置付ける。
 - 主たる役割として「ケース会議等支援に係わる会議の招集と主催及び進行」「SC・SSW、総合育成支援員等非常勤職員との情報交流と共有及び勤務日程の調整」を担う。
 - 教育支援部の一員としての役割「生徒情報の収集・整理」「関係教職員間での情報共有」も担う。

4. 調査研究の校内組織

研究指定実行委員会（校内呼称）

氏 名	職 名	校務分掌・担当教科等
中塚 洋	定時制副校長	
澁谷 賢一	教 諭	教務部 教務主任 理科
八木 幸一郎	教 諭	生徒部 生徒指導主事 国語科
高坂 林	教 諭	進路部 進路指導主事 英語科
椿 浩子	教 諭	保健給食部 保健主事 英語科
八木 洋子	教 諭	教育支援部 部長 家庭科
山根 明子	養護教諭	保健給食部
中山 千恵美	教 諭	教育支援部 国語科
小島 直起	教 諭	3年担任 学年主任 理科
小野 潔	教 諭	教務部 数学科
十河 博子	スクールカウンセラー	
三木 泉	スクールソーシャルワーカー	

Ⅲ 調査研究の報告

1. 調査研究の目的及び目標

本校では、在校する生徒たちの80%前後が何らかの『困り』を抱えて入学してくる。

生活保護等の経済的課題や児童相談所の見守り対象などといった家庭環境の『困り』がある生徒、不登校の経験をしたという『困り』がある生徒、また、発達障がいの診断を受けている等の特性に関する『困り』がある生徒である。このような生徒に対して、専門職との協働はもちろん、学校内での支援だけではなく外部機関との連携が必要な状況である。

そのような状況の中でも生徒たちの学習を支援して確かな将来に繋げるため、平成28～29年度の2年間にわたって文部科学省委託事業「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」に取り組み、平成30年度からは本研究「多様性への対応に関する調査研究」（昨年度までの2年間は「高等学校における次世代の学習ニーズを踏まえた指導の充実事業（多様な学習ニーズに応じた指導方法等の確立・普及）」）に取り組んで、支援の事例を積み重ねてきた。

入学時に中学校からの聞き取りや保護者面談等で得た生徒情報の「効果的な収集」と「適切な共有」を基盤とし、ケース会議等においてSC及びSSW等の専門職との「情報の共有及び有効活用」をしつつ協働することを通して、個々の生徒への対処的支援策だけではなく予防的な支援対策を実施してきた。その取組の成果は徐々にではあるが上がりつつあり、また取組を通して多くの教職員の意識改善にも繋がってきたところである。

しかし、適切な支援を行うことで環境や特性に関する『困り』が解消に向かっても、学力不振から中途退学や原級留置となる生徒が存在する。そうした生徒には、個々の状況に応じた学習指導とあわせて評価方法の改善または新規の作成が必要となると考えるが、現状は各教員の経験に頼った対応にとどまっており、より組織的かつ持続可能な方策の策定が求められるところである。

(1) 目的

本調査研究においては上記の「適切な支援を行うことで環境や特性に関する『困り』が解消に向かっても、学力不振から中途退学や原級留置となる生徒」の解消を目指して、組織的かつ持続可能な「学習指導方法」と「評価方法」の改善または新規の作成を目的とした。

(2) 目標

目標としては、次の3点を設定した。

目標1 学習態勢確立のための支援方法及び支援体制の具体的策定

個々の生徒が、そのニーズに応じて学習に臨む態勢を整えることができるように教職員が適切に支援できるような校内システムの構築に取り組む。

教職員とSCやSSW等の専門職とが一体となり、それぞれの専門性を生かした効果的かつ効率的な連携のもと支援をする方法やシステムのより良いあり方を、具体的な実践を通して策定する。

目標2 学習指導方法と評価方法の確立

生徒個々のニーズに応える学習指導方法の開発にあたり、「発達障がいがある生徒を対象とした特性を踏まえた学習指導方法」「小学校・中学校で長期欠席（不登校）があった生徒を対象とした未学習内容を補充しながらの学習指導方法」について事例を蓄積し分析する。また、本年度は「日本語以外を母国語とする生徒を対象とした学習指導方法」についても分析する。

学習目標の達成度合いを評価する評価方法については、個々に応じた学習指導方法に適切しながら他の生徒の評価との整合性を持たせた評価方法を策定する。

目標3 支援を支える教職員の知識の深化

研修を通して教職員の知識・認識の深化と意識の変革を目指し、校内での研修会を実施した。生徒たちの多様なニーズに対し柔軟に対応していくための情報を得る機会とした。併せて専門職との有機的な協働のための情報共有の場ともした。

また、教職員の知識・認識の深化を目指して先進校の視察を行い、得られた知識を校内で報告して共有を図った。

2. 調査研究の取組及び成果

2 - 1 学習態勢確立のための支援方法及び支援体制の具体的策定

(1) 支援体制のシステム化

取組の内容 ① 支援委員会

構成メンバーの見直し

定例週1回の支援委員会の開催も校内で定着し、昨年度は年間を通じて活発に生徒についての情報・状況についての話し合いが行われた。しかし、昨年度は支援委員会のメンバーに担任団の代表がいなかったことで、生徒の問題が挙がってきても、一番身近に接しているクラス担任の意見が聞けず対応が遅れることがあった。その反省を踏まえ、本年度より支援委員会の構成メンバーを以下の通り変更した。

副校長

教育支援部長（「支援コーディネーター」）

本年度より教育支援部部員は不参加

各学年代表の担任 本年度より追加

生徒部代表（生徒指導主事）

保健給食部代表（保健主事，養護教諭）

SC

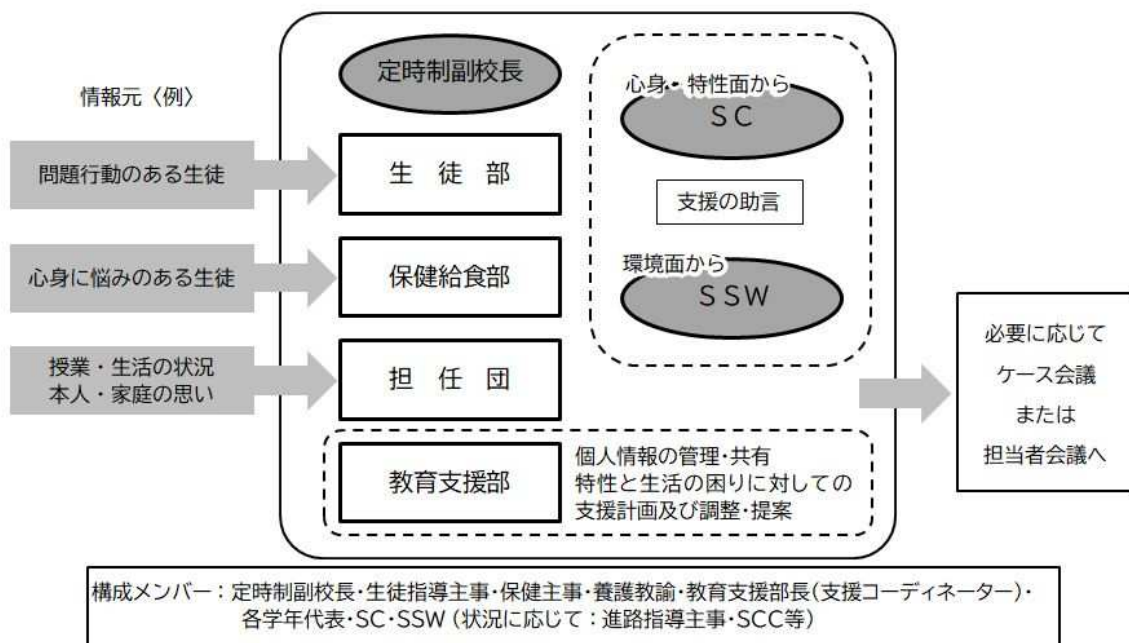
SSW

必要に応じて（事案に応じて）以下についても会議に参加することができることとする。

進路部代表（進路指導主事・スクールキャリアコンサルタント（以下、「SCC」という。））
教務部代表
教育支援部部員

位置づけの再定義

支援委員会は情報共有の場である。またケース会議や他の行動に移るための仕分けの場であると改めて再確認し設定した。（ただし、必ずしも支援委員会で話し合われたことがケース会議の絶対条件ではない。）



取組の成果

現在、西京高校定時制における生徒の学習体制確立のための支援には2つの方向性がある。

1つは、本人の特性に対する支援。いわゆる「特別支援教育」に関するもので、発達障がいやその他の障がい・疾病による『困り』を抱える生徒に対し、高校教育という枠の中で、どのように支援していくことが本人の成長につながるかを考えていくことである。本来、本校の支援委員会が定例になったのは、こちらの理由によるところが大きい。しかし実際は、SCやSSWとの協働を重ねていく中で、『特性に対する支援』以前に、もう1つの方向性である『家庭事情・生活環境に対する支援』、すなわち貧困やネグレクト等、学びに向かう以前の『困り』を抱えているために、自分の学習や進路を考えることもできない生徒への支援に迫られることの方が多かった。

次ページの表は、昨年度及び本年度の支援委員会で話をした内容の延べ人数である。生徒の問題状況の原因は、1つの理由に絞り切れるものではなく、特性・心身の不調・人間関係・家庭環境等が複雑に絡み合っている。

支援委員会での情報共有事例とその後の対応

	欠席・不登校	心身の不調	学力・授業	人間関係	問題行動	家庭事情	進路	その他	対応先				診断あり	その後	
									ケース会議へ	保護者	S C	S W		転学・退学	休学
昨年度合計	41	19	19	19	23	21	30	2	3	9	13	8	12	8	4
本年度合計 (5月以降)	114	58	18	21	41	47	5	11	14	19	13	13	13	7	4

毎週行う支援委員会ではその1週間で起きた生徒の情報・状況を共有する会議になるため、どちらかという欠席や不登校の状況の確認になることが多く、毎日学校にまじめに登校している生徒への『特性に対する支援』の方については議題に出ることが少なかった。しかし、問題行動や家庭事情への支援については、本年度は担任団代表が構成メンバーに入ったことで情報共有のスピードアップにつながった。その結果、支援委員会からケース会議に移行して話し合った件数は昨年度より増加した。

また、昨年度までは支援委員会の内容をどのように全教職員に伝えていくかが課題であった。そこで、本年度は年度途中から「支援委員会だより」をメール配信するようにした。その手順は以下の通りである。

- 1) 支援委員会の議事録をPCサーバ内にパスワードをかけて保存する。
- 2) 「支援委員会だより」に、その週に話し合った生徒の名前だけを載せ、全教職員にメール配信する。
- 3) メールから、保存場所のフォルダへのリンクを貼る。
- 4) メールを受け取った教職員は、気になる生徒の名前が入っているときは、自分でファイルを開き、情報を確認する。

議事録の保存からメール配信までは、「支援コーディネーター」が行った。このことで、全教職員に今現在、どの生徒が不調をきたしているのかという情報が伝わりやすくなった。なお、これまで通り、重要な案件については職員会議で情報を共有した。

課題としては、先にも書いた通り支援委員会では、会議の性質上、毎日学校には来ているが授業で『困り』を抱える生徒の情報を拾い上げるのが難しい状況にある。すでに診断がついて、本人や保護者から積極的に要望がある生徒については話ができるが、自分からはその『困り』が伝えられない生徒をどのように見いだして話題にすることができるかが、今後の課題である。対応策として、本年度は学期ごとに、教科担当者から「気になる生徒」の情報をあげてもらったようにした。あげてもらった情報を『生きた支援』に結びつけていくために何ができるのかを、今後は考えていかなければならない。

【本年度、支援委員会からケース会議に移行した例】

ケース1 不登校・発達障がい疑いあり・子どもはぐくみ室（役所福祉課）見守り対象生徒

課題：通信制高校へ転学を希望するが、本人にパワーがなく、家庭の援助が期待できないため、引きこもり状態になる恐れがあった。

対応：クラス担任・「支援コーディネーター」・SSW・子どもはぐくみ室で相談し、転学先の高校への支援情報の引継ぎと、地域での見守り支援についてのケース会議を行った。

参加者：本校クラス担任・SSW・子どもはぐくみ室・生活保護のケースワーカー・転学先教員・地域NPO法人・「支援コーディネーター」

ケース2 保護者が新型コロナウイルス感染への恐怖から学校を休ませるだけでなく、家庭から子どもを出さなくなった。家庭ごと引きこもり、本人や保護者から不安定な言動がでていた。

課題：孤立状態が続くと、家庭自体が危険である可能性があった。

対応：子どもについては児童相談所に通告し、家庭（保護者）にどんなケアが入れられるかを相談するためのケース会議を開いてもらった。

参加者：クラス担任・SSW・児童相談所担当・生活保護のケースワーカー・「支援コーディネーター」

その他、SC、SSWが関わった例

『ASD生徒への対応についての助言』

『生活保護家庭の自立に向けたお金の管理・計画』

『健康保険のない生徒への支援』

『児童相談所・警察・カウンセリング外部機関への相談・連携』

取組の内容 ②「支援コーディネーター」

「支援コーディネーター」とは、校内の各分掌やそれぞれの事情に詳しい専門職（SC・SSW）や外部機関との連携をコーディネートする者と設定している。本校では特別支援だけを行う特別支援コーディネーターではなく、「支援コーディネーター」という名称をとっているが、それは取組内容①「支援委員会」の項でも書いた通り、本校の学習体制確立のための支援の方向性が2つあることを理由にしている。

「支援コーディネーター」が特別な力量のある教員にしか務まらないという事では、担当者の固定化、あるいは人事異動による人材の枯渇等が危惧される。したがって、本年度は最終年度として、「支援コーディネーター」を担うことになった者の指針とするための活動内容の文章化を行うことを目指した。

位置づけの確定

「特性による『困り』を抱える者」または「家庭環境・生活環境に関して『困り』を抱える

者」の直接支援を行う教職員（クラス担任や教科担当等）の活動を，校内の各分掌や教職員，SCやSSWといった専門職と協働しながら多面的に支え，調整する者とする。

役割の確定

ア 支援委員会の主催・進行をする。

- ・支援委員会に向けて情報を収集し，レジュメを作成する。

事前に各担任団・分掌をまわり，生徒の情報を聞いておく。雑談の中から，支援委員会であげるべき情報を整理し，取り上げる。レジュメを作成しながら，当日の支援委員会の進行を前もって考えておく。

- ・支援委員会の報告の中で，「情報共有のみですむもの」「今後の対応をその場で分担するもの」「ケース会議を要請するもの」に仕分けする。
- ・ケース会議に移行する場合は，会議の構成メンバーと開催予定をその場で調整する。
- ・支援委員会の議事録を作成し保存する。
- ・「支援委員会だより」を作成し配信する。

イ SC・SSWとの情報交流と仕事の調整をする。

- ・SC・SSWと定期的に情報共有をする。
- ・問題に対し支援プランを立てる上で考えられること，使える制度や外部機関等のアドバイスをもらう。その際必要な情報を提供する。
- ・SC・SSWに対応してもらう場合，日程調整を行う。

ウ 生徒支援プランの原案を作成する。

- ・本人・保護者からの要望や担任団や教科から上がってきた情報をうけ，上記専門職のアドバイスのもと，教育支援部及びクラス担任が協力し生徒支援プランの原案を作成する。
- ・作成した支援プランの原案を，支援委員会やケース会議で検討し完成させる。

<支援プラン>

特別支援・・・・・・・・・・個別の指導計画（個の課題に応じた指導計画）

家庭環境・生活環境の困り・・・・・・・・アセスメントシートと支援計画

エ 全教職員で生徒情報や支援プランを共有する仕組みを支える。

- ・情報収集と資料作成については教育支援部が中心になり，全教職員で分担する。

<情報収集先>

新入生 中学校訪問・入学前面談・児童相談所

年度途中 1) 支援委員会（担任団・各分掌から）

2) 教科担当者（学期ごと・随時）

- ・年度当初の生徒情報共有会議を主催する。

中学校訪問・入学前面談等の情報を整理しプロフィールシートを作成する。

在校生については，上記のものに昨年度の状況を組み込み改良する。

- ・ケース会議で決定したことを支援委員会や職員会議で報告する。
- ・「支援委員会だより」をメールで配信する。

オ 生徒支援プランの評価と改善計画を立てる。

- ・ユニバーサルデザイン授業の啓発。
- ・支援委員会や教科からの情報をもとに、教育支援部で授業での総合育成支援員の配置を決める。

取組の成果

上記の取組の中で、本年度は『支援委員会・ケース会議の主催・進行』と『SC・SSWとの連携の調整』に特に重点的に取り組んだ。その結果、本年度は担任団から情報を得てから実際の支援に移るまでのスピードアップが図れたのではと感じている。

しかし、ケース会議はSC・SSWの勤務日である支援委員会の曜日に行われることが多く、加えて、支援委員会の情報収集・資料作り・議事録作成・「支援委員会だより」配信等の段取りが全て同じ日に偏るため、「支援コーディネーター」がアクティブに動くためには、校内配慮として年間を通してこの曜日には授業を入れないという事が必要であった。

(2) 生徒支援プランの評価

取組の内容 ① 個別の指導計画に関するPDCAサイクル

本年度、個別の指導計画を作成した生徒数は、在籍生徒132名に対し、3年生が2名、2年生7名、1年生が20名である。これは京都市立高校としてはかなり多い数になっている。しかし高等学校の教員は個別の指導計画を書き慣れていないことが多く、昨年度までは、京都市立学校の指定の書式で記入はしていたものの、年度途中でうまく生かし切れていない部分が多かった。

そこで本年度は、高等学校用に書きやすさ・使いやすさを考えた書式の見直しと、年度途中で指導計画の状況に応じた修正をしていくことを目標に計画を立てた。

取組の成果

◎ 書式の見直し・作成

「個別の指導計画のプロフィールシート」(巻末 **資料1**) 部分は、入学時に収集した情報から教育支援部が作成する形に変更。

『生徒の実態(気になる状況)』『配慮の内容』『自立支援・キャリア指導の履歴』を「個別の指導計画様式1」(巻末 **資料2**) に、『本人・保護者の長期・短期目標』と『各教科の具体的な支援計画』を「個別の指導計画様式2」(巻末 **資料3**) に記入する形にした。

◎ Plan

- ・新入生は入学時の情報と入学後の生活、2・3年生については昨年度の生活をもとに、教育支援部と担任団で相談し、個別の指導計画が必要だと思われる生徒をピックアップする。(5月下旬まで)
- ・支援委員会で対象生徒を決定する。(6月中頃)
- ・プロフィール部分は教育支援部で作成する。(6月中頃まで)

- ・個別の指導計画様式1の部分と様式2の長期・短期目標部分を7月の三者面談をもとにクラス担任が作成する。(7月)
- ・個別の指導計画様式2の教科の指導計画部分を各教科担当が入力する。(7月末まで)

◎ Do

- ・2学期から計画に基づき、指導開始。(9月～)
(中間Check)
- ※ 2学期末に指導と対象生徒の変容を振り返り、計画の見直しをする。(12月)
- ※ 3学期から新たな計画で指導を行う。(1月～)

◎ Check

- ・年度末には、指導を振り返り、対象生徒の変容を記入しておく。
- ・次年度の計画を立てて引き継ぐ。→次年度の「◎ Action」へ
- ※ 本年度はコロナ禍のため、実際は計画が1か月程度遅れた。
その関係で、2学期末に計画を見直すことができなかった。
(1月末に個別の指導計画の年度途中での修正についての教職員研修を行った。)

取組の内容 ② アセスメントシート・プランニングシートに関するPDCAサイクル

家庭環境・生活環境への困りを抱える生徒には、随時作成する。

◎ Plan

- ・問題状況発覚後、情報を収集し、アセスメントシートを作成する。
- ・ケース会議で、アセスメントシートをもとに支援計画を作成する。

◎ Do

- ・計画に基づき役割を分担した教職員が行動する。

◎ Check

- ・再びケース会議を行い、状況の変容を確認、計画を調整する。

◎ Action

- ・新たな計画を実行する。

取組の成果

支援委員会が活発になったこと、またSSWの勤務日が週2日に増えたことによって、情報共有のスピードがあがった。それに伴って、これまでクラス担任だけが抱え込んでいたような内容も、各部署の代表やSC・SSWが参加してのケース会議になることが増えた。アセスメントシートの作成にはSSWの力に頼っている現状がある。SCやSSWにケース会議で助言を受けることで、これまで教職員だけで考えていた時よりも支援方法の幅は広がった。

しかし問題の内容によっては、生徒指導なのか生徒支援なのかの区別のつかないものもあり、対応に苦慮することもあった。

(3) ソーシャルスキルトレーニングの強化

取組の内容

昨年度に引き続き、1年次に「総合基礎」・2年次には「総合進路」が設定されている。また、個別支援の一環として、希望者に通級「生活基礎」「生活活用」を置いている。

① 1年生「総合基礎（総合的な探究の時間の校内呼称）」

1年生「総合基礎」は平成30年度より実施し3年目を迎えた。コーピング、SSTを主な内容としキャリア教育の視点を持って授業を組立てた。

ねらいは、生徒自身が自分を見つめ苦手なことも含めて自分を認めることと、ストレスに対処する様々な方法を知りより良い学校生活を送ることである。

授業は、事前検討会をもち目標や進め方を共有した後に行った。企画担当者が指導略案と教材を用意し、授業者であるクラス担任と共に生徒の実態をふまえて検討をすすめた。SCも参加し専門職の視点から助言や解説を行い、内容が深められるよう工夫を重ねた。本年度も生徒の状況に応じて内容の整理と改善を行った。

◎ コーピングについて

年間の学習内容は5つのエクササイズを配置して計画的に実施した。

- ① 導入：この授業で学ぶことを知る。自分の行動について知る。
- ② 認知：人との関係でストレスを感じたときどうするか等「考え方」について学ぶ。
- ③ 行動：ストレスを小さくして人間関係をつくる方法を具体的に学ぶ。
- ④ 情動：身体と心を楽にするリラックスマethodを知る。
- ⑤ 総合：SSTゲームやグループワークを体験し、日常生活に生かせるよう練習する。

◎ SSTについて

SSTの要素を盛り込んだ授業を行った。最初の授業で「名刺交換ゲーム」を行いクラスのメンバーと会話をかわす機会を設けた。コミュニケーションの技術、アサーションの技術を学習し、グループワークやSSTゲーム等で充実を図った。学校行事を経験し時間の経過とともに周囲との関係に広がりが見られるようになった。

◎ キャリア教育の視点について

文化祭や体育祭などの学校行事や長期休業の際に、振り返りを行った。都度の自分の行動や思いを見つめながら、1年間を通して学校生活を捉える機会とした。また、学んだ事の確かめや「総合基礎」の1年間の振り返りも行った。

1年生を終える時点で、将来について考える機会を設けた。「Planning Tomorrow with Hope(希望に満ちた未来の計画)」を「幸せの一番星シート」(巻末 **資料4**)とよび、記入しながら近い将来について考えた。身近な一步をプランニングすることで2年生への意識づけとした。

◎ 導入とアセスメントのための「コグトレ」について

授業開始時に気持ちの切り替えとして短時間(5~10分)の「集中カトレーニング」を取り入れた。「コグトレ」(宮口幸治著「コグトレ認知機能強化トレーニング」三輪書店)を使用し、生徒の関心の度合いや出来具合に応じて課題を選択した。生徒に好評で、毎回楽しんで取り組むことができた。生徒がどのように取り組むのか、どこでどのようにつまづいたのかを注視することでアセスメントの機会にもなり生徒理解を深められた。

「総合基礎」年間実施内容

回	取組内容		備考 (その他の準備)
1	導入①	オリエンテーション プロフィールシートで名刺交換	
2	導入②	K J Q調査を実施 自分の木を描こう	K J Q調査用紙 自分の木画用紙
3	導入③	自分を知ろう SRS-18アンケート	
4	導入④	自分を知ろう TAC-24アンケート	MIM読み名人
5	認知①	気持ちはどこからくるの？	
6	認知②	ABC「こころの法則」	
7	認知③	K J Qの個人分析シートの見方	1学期の振り返り
8	認知④	いろいろな考え方をしてみよう！	夏季休業振り返り
9	認知⑤	認知を変えてストレスを小さくしよう！	
10	行動①	コミュニケーションの技術① ～傾聴・相手の話を上手に聴こう！～	トーストランプ
11	行動②	コミュニケーションの技術② ～うまく質問をしてみよう！～	体育祭振り返り
12	行動③	コミュニケーションの技術③ ～答え方を工夫してみよう！～	
13	行動④	アサーションの技術① ～言いたいことをうまく伝えてみよう！～	
14	行動⑤	アサーションの技術② ～気持ちのよい断り方、頼み方～	
15	行動⑥	アサーションの技術③ ～上手な謝り方をしてみよう～	
16	情動① 情動②	リラックス法（呼吸法・弛緩法）を知ろう 自己開示ゲーム「アンゲーム」	文化祭振り返り 「こころかるた」
17	情動③	怒りへの対処：温怒計 ～気持ちのコントロールをしてみよう！～	
18	総合①	グループワーク ～「SSTすごろくゲーム」を楽しもう～	新年シート SSTすごろく
19	総合②	K J Q調査2回目を実施 学習のまとめ「ストレスマネジメントクイズ」	K J Q調査用紙
20	総合③	グループワーク ～「無人島脱出ゲーム」で問題解決！～	
21	総合④	まとめ：キャリアパスポート記入 講話「ジョハリの窓・心の器イメージ」	キャリアパスポート
22	総合⑤	まとめ：自分の成長を振り返ろう ～将来について考えよう～ 「Planning Tomorrow with Hope (PTH)」	1年間の振り返り PTHシート

※ K J Qマトリックスは早稲田大学人間科学学術院の菅野純氏と教育現場に立つ教師が共

同で開発した教材。「こころの土台」を構成している「こころのエネルギー」の充実度と「社会生活の技術」の成熟度の測定をする。

※ コグトレは、認知機能の強化を目的としたトレーニングで「覚える」「数える」「写す」「見つける」「想像する」の分野で構成されている。児童精神科医である宮口幸治氏が、誰でも比較的手軽にできるトレーニングとして開発された。

※ 参考資料

- ・菅野純他著「人間関係スキルアップワークシート」学事出版株式会社
- ・東京都教育委員会「マイ・ライフ・デザイン～自立へのナビゲーション～」
- ・宮口幸治著「コグトレ みる・きく・想像するための認知機能強化トレーニング」三輪書店

② 2年生「総合進路（総合的な探究の時間の校内呼称）」

2年生「総合進路」は、昨年度より配置されたSCCの協力のもとに、授業内容の改善に取り組んだ。『進路について調べ、自分の卒業後の姿を想像させる』というテーマのもと、コンピュータを使っての調べ学習、コミュニケーション能力の向上を目標としたグループワーク（自分の考えを表明する、他者の発表を聴く）、iPadを使ってグループプレゼンテーションを実施した。

本年度はコロナ禍の関係もあり、グループワークにも制限があり、代わりにロイロノートを使って、『自分の意見を表現し、他者の意見を取り入れる』ことにも取り組んだ。

「総合進路」年間実施内容

回	取組内容	備考
1	総合進路について - ガイダンス キャリアパスポートについて	[プレゼン練習] [グループワーク]
2	プレゼンをしてみよう	[プレゼン実施]
3	レッツスタート 高校2年生（1）	
4	資格検定について（1） 調べてみよう	[調べ学習] [グループワーク]
5	資格検定について（2） 調べてみよう	[調べ学習] [グループワーク]
6	資格検定について（3） 発表しよう	[プレゼン①]
7	職業 いろいろ発見（1）オープンキャンパスについて	[調べ学習]
8	進学について考える + 奨学金制度について	
9	職業 いろいろ発見（2）興味のある職業を調べる	[調べ学習]
10	自分のレディネステストの結果を分析してみよう	
11	仕事選びのステップ（1）仕事を選ぶ4つ（3つ）の視点	
12	仕事選びのステップ（2）求人票の見方	

13	仕事選びのステップ（3）3社の求人と比較して	[グループワーク]
14	仕事選びのステップ（4）3社の求人と比較して	[グループワーク]
15	仕事選びのステップ（4）3社の求人と比較して	[プレゼン②]
16	自己PRスキルズ（1）自己PRについて考えよう	
17	自己PRスキルズ（2）自己PRのための自分分析	
18	自己PRスキルズ（3）自己PR文を書こう ①	
19	自己PRスキルズ（3）自己PR文を書こう ②	
20	自己PRスキルズ（4）志望動機を審査してみよう	[ロイロ活動]
21	自己PRスキルズ（5）志望動機の審査を発表しよう	[ロイロ活動] [プレゼン③]
22	自己PRスキルズ（6）志望動機を書いてみよう	
23	面接試験トレーニング（1）面接の基本 マナーを知ろう	
24	面接試験トレーニング（2） 面接 実践してみよう 評価してみよう	[ロールプレイ]
25	面接試験トレーニング（3）面接 まとめ 振り返ってみよう	

取組の成果

1年生の「総合基礎」は3年目の実施となった。生徒の実態をふまえて内容の整理と充実を図ってきた。生徒にとっては未経験の内容であるため、導入として「コグトレ」を取り入れ教科とは異なる学習に臨む切り替えとした。生徒は意欲を持って取り組み、グループワークで発言する機会も増え集団の中で関係性を築くうえで役立っていた。授業者であるクラス担任、SC、企画担当者の検討会を定期的に毎回持つことができ、内容充実を図りスムーズに授業を進めることができた。

2年生の「総合進路」は、昨年度より進路担当に加えてクラス担任が授業に入ることになり、生徒の実態や意思をより身近に把握できた。また、SCCも授業に入り、授業内で講義を行う場面もあった。年間を通じて内容の整理・充実が図られた。

現3年生は、この新しい取組を行った1年目の生徒であるが、早期から自分の進路を見つめ、調べ、話し合い、プレゼンテーションをすることで、以前の学年と比べて、進路活動に関してより積極性が見られた。

この3年間、全生徒へのSSTの授業を行ってきたことによって、他の授業でグループワークやプレゼンテーションを行う際にもスムーズに行えるようになっている。SSTをしたことで、生徒の中の苦手意識が減り、「コミュニケーション能力の向上」に一定の効果があったものと考えられる。

また、対象生徒は限られているが、実施2年目を迎えたLD等通級指導教室を受講している生徒も個々の課題の改善に効果が認められている。

2 - 2 学習指導方法と評価方法の確立

(1) 学習指導方法の確立

取組の内容

研究3年目となる本年度は、昨年度から引き続き「① 発達障がいの診断を受けている生徒」・「② 不登校の経験により未学習があると考えられる生徒」・「③日本語運用能力が不足している外国人生徒」を対象にした。そして、対象生徒が持つ『困り』を「書く」・「話す」・「聞く」・「切り替え」・「時間の管理」・「物の管理」という6項目に分けて研究を行った。本研究の対象生徒は、1年次と2年次の変化を比較するために、昨年度と同じ生徒を対象とすることにした。

本年度は「授業のチェックリスト」(巻末 **資料5**) の項目を精選し、全教員に回答してもらった。生徒の『困り』の改善を評価するために、指導方法の運用前後に教科担当者から見た生徒の学習状況の様子を「学習状況のチェック表」(巻末 **資料6**) によって調査し、その結果を分析して指導方法の評価を行った。

なお、以下のような年間のスケジュールで取り組んだ。

6月上旬	<ul style="list-style-type: none"> * 全教職員へ取組についての説明。 ⇒ 研究内容と対象生徒を共有。本年度の展望を説明。
6月下旬	<ul style="list-style-type: none"> * 指導方法の検討。 ⇒ 昨年度に作成した「授業のチェックリスト」の項目を精選して、新たな「授業のチェックリスト」を作成。
7月下旬	<ul style="list-style-type: none"> * 全教員へ指導方法を提案。 ⇒ 「授業のチェックリスト」の実施と提出を依頼。
10月中旬	<ul style="list-style-type: none"> * 指導方法について実施状況の集約。 ⇒ 2学期始業式から中間考査の期間についての「授業のチェックリスト」を集約。
12月中旬	<ul style="list-style-type: none"> * 指導方法について中間報告。 ⇒ 「授業のチェックリスト」の実施結果を報告。 * 「学習状況のチェック表」の依頼。 ⇒ 対象生徒の教科担当者へ「学習状況のチェック表」の実施と提出を依頼。
1月中旬	<ul style="list-style-type: none"> * 指導方法について中間評価。 ⇒ 対象生徒について、対象生徒の教科担当者が「学習状況のチェック表」に回答し、集約。 ⇒ 回答された結果をもとに指導方法の分析。
2月上旬	<ul style="list-style-type: none"> * 指導方法のまとめ。 ⇒ 結果を分析、成果をまとめた。

本年度の新たな取組としては、昨年度の課題を踏まえて「授業のチェックリスト」の項目を精選した。これによって実施率が上昇した。「学習状況のチェック表」については、昨年度からの生徒の変化を比較するために、文言など変えずに実施した。

(a) 「学習状況のチェック表」について

生徒の『困り』を「書く」・「話す」・「聞く」・「切り替え」・「時間の管理」・「物の管理」という6項目11観点に整理し、観点毎に3点満点で調査するものである。昨年度は1学期と2学期、3学期に各1回実施し、生徒の変化を分析した。本年度は、昨年度選定した生徒を引き続き対象として、2学期に実施し、変化を分析した。

(b) 「授業のチェックリスト」について

各教科で行われている指導方法をまとめ、チェックリストを作成した。その際に、本研究の対象生徒だけでなく、すべての生徒にとって学びやすい授業になるよう、ユニバーサルデザインの観点から各項目を作成した。また、「学習状況のチェック表」に合わせて「書く」・「話す」・「聞く」・「切り替え」・「時間の管理」・「物の管理」の6項目に関する指導方法を項目ごとに3つから4つに絞り、合計数が20項目になるようにした。また、授業内で視覚的に情報を伝えることが、より効果的であると考え、指導方法の内容として重視した。

取組の成果

「授業のチェックリスト」の実施状況について3つの項目でアンケートを行い、集計した。「これまで」には、意識して授業で実践していることであれば○、知識としてはあるが実践できていないことであれば△、意識できていなかったことであれば×を回答する。「これから」には、指定した期間にその項目の指導方法を実施するのか、教科特性に合わないなどで実施しないのかを回答する。「結果」には、指定した期間に、授業で常に意識してその項目の指導方法を実施できていれば○、期間の半分ほどは意識して実施できていれば△、実施できなければ×を回答する。回答数のうち、それぞれの項目がどの割合であったのかを以下の表で示す。

授業のチェックリスト集計結果（平均値）

		令和元年度						令和2年度					
		書く	話す	聞く	切替	時間	物	書く	話す	聞く	切替	時間	物
これまで	○	65.2	45.2	70.0	72.9	34.3	51.2	63.2	68.6	86.3	79.4	70.6	62.7
	△	5.4	9.5	11.4	11.4	15.7	3.6	17.6	25.5	11.8	14.7	17.6	19.6
	×	10.7	19.0	4.3	5.7	28.6	16.7	5.9	5.9	2.0	5.9	9.8	15.7
これから	実施	56.3	47.6	64.3	68.6	38.6	45.2	60.3	76.5	86.3	88.2	68.6	56.9
	不実施	8.9	19.0	2.9	4.3	22.9	15.5	22.1	17.6	7.8	7.4	25.5	37.3
結果	○	29.5	16.7	32.9	34.3	14.3	21.4	55.9	60.8	74.5	75.0	52.9	47.1
	△	1.8	4.8	4.3	4.3	5.7	4.8	0.0	7.8	5.9	5.9	9.8	3.9
	×	5.4	9.5	1.4	4.3	14.3	7.1	1.5	2.0	0.0	1.5	2.0	2.0

「授業のチェックリスト」については、全体の実施率が昨年度よりも上昇しただけでなく、項目ごとにも指導方法が活用できているという人数が増加していた。これは多くの教員が様々

な支援・指導を行う意識が高くなっているからではないかと考える。特に「聞く」においては、昨年度より大幅に実施率が増加しており、教員が意識して取組を行っていたことがうかがえる。

次に、昨年度から実施している「学習状況のチェック表」の結果を比較するためにグラフに表した。1年生の1学期と3学期の結果と2年生の2学期の結果を6項目で比較した。対象生徒の教科担当者が項目ごとに3（できている）・2（どちらとも言えない）・1（できていない）のいずれかで評価し、その平均値を求めた。

まず、全体の傾向は、入学当初と比べてほとんどの項目で上昇が見られる。

「書く」という項目では、1年次の1学期から3学期にかけて、『困り』が減少してい

ることがうかがえる。これは、教職員のアンケートから、教員が授業内で行っている工夫（プリント、ICT機器の使用など）の成果ではないかと考える。

また、「授業のチェックリスト」の「書く」に関する項目である番号1「(プリントの) 記入欄に通し番号を振っている。」と番号2「(プリントの) フォントなど工夫している。」を8割近くの教員が実施していることも関係しているのではないかと考える。

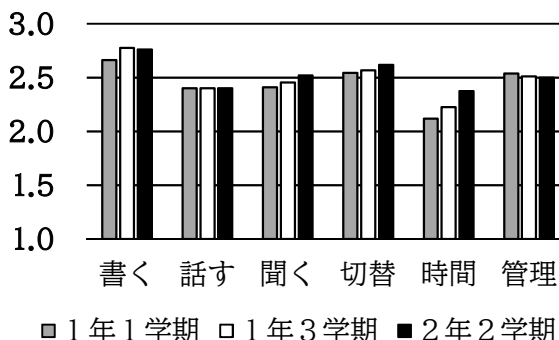
「話す」という項目では、入学当初と比べてほぼ変化がない。これは本年度、新型コロナウイルス感染症の感染予防のため、多くの教科でペアワークやグループワーク、発表などの「話す」活動が少なくなり、生徒たちが授業内で「話す」機会が少なく、経験を重ねることが難しくなったことも要因のひとつではないかと考える。

「切り替え」という項目では、2年次に成長が見られ、「物の管理」という項目については、あまり大きな変化は見られなかった。「授業のチェックリスト」の「切り替え」に関する項目である番号11「授業の準備状況を確認している。」は9割の教員が実施しており、この項目は昨年度の「授業のチェックリスト」から内容を新たに変更したものであった。また、「物の管理」に関しては、チェックリストの指導方法を実施してみたとした教員の割合が他よりも低い結果であった。

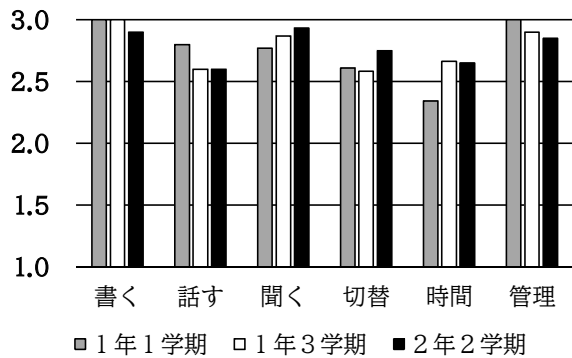
「聞く」、及び「時間の管理」という項目においては、入学当初と比べると大きく上昇している。「聞く」では、生徒がイメージを持ちやすいような工夫（ICT機器の活用など）を行うなど、教員が多面で工夫・支援を行ったことにより、生徒の『困り』が改善されたひとつの要因になったと考える。

「時間の管理」では、生徒たちに見通しを持たせるような取組を行ったことで、行動しやすくなったと考えられる。「自己目標マップ」などの取組は、生徒たちのアンケート結果からも非常に有効であったといえる。

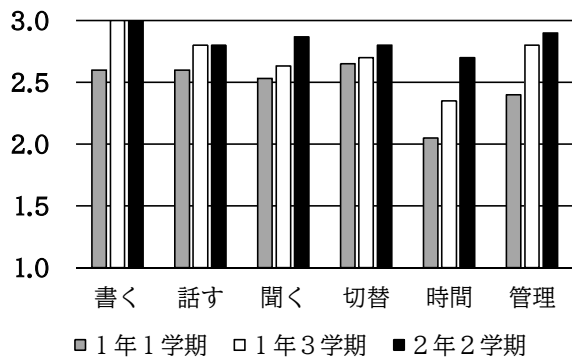
「授業のチェックリスト」の「時間の管理」に関する項目である番号17「終わりの段階を示している。」は回答した全教員が実施しており、『困り』の減少に関係しているのではないかと考える。



生徒① 中学2年生からほとんど登校できていなかったが、本校1年生では欠席することなく、登校することができた。また、2年生の現在でも、順調に登校を続けている。評定平均も4.5以上と高い水準を保っている。特に、「時間の管理」において、入学当初より、『困り』が少なくなってきた。このことが自信のひとつになり、現在はアルバイトを始め、将来の夢の実現のために学校生活を前向きに過ごしている。

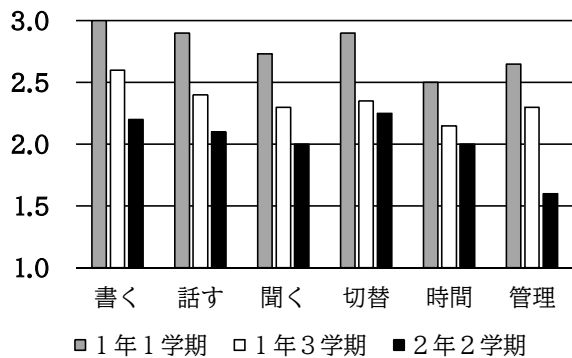


生徒② 本校に入学してから、1日も欠席することなく、落ち着いて学校生活を過ごしている。入学当初は、「時間の管理」「物の管理」に対して、『困り』を強く感じていた。しかし、学習を積み重ねることで、評定平均も上がった。



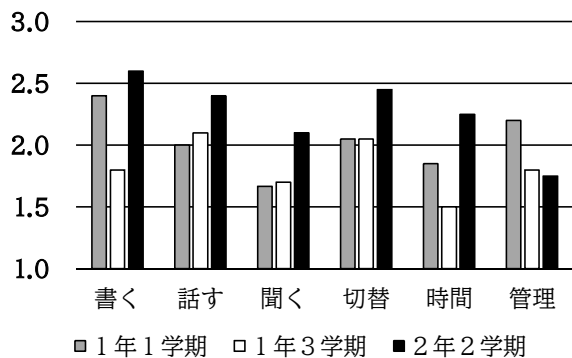
現在、始業前に登校し、週2回英語と数学を自主的に勉強している。また、検定試験などを受検するなど、学習に対しての意欲も高まっている。

生徒③ 本校に入学してから、それぞれの項目において『困り』が強くなっている。学校を欠席することも多く、落ち着いた学校生活を過ごしているとは言い難い。



本生徒の抱えている背景や問題に対し、教職員やSC・SSW・SCCと協働しながら、支援体制を再度構築していく必要がある。

生徒④ 中学校はほとんど登校できなかった。自分の気持ちを上手く伝えることが苦手なため、本校1年生の時には人間関係において、本人が『困り』を感じる場面が多くあった。入学当初は、「聞く」ことに『困り』を強く感じていたが、それは他者と信頼関係を構築することが難しいことが原因であったと考える。



SC・SSWと協働しながら、多くの教職員が本生徒との対話を粘り強く続け、信頼関係を少しずつ築いていくことができた。

その結果、少しずつ落ち着いて学習できる環境が整いつつある。それに伴い、多くの項目において、『困り』が改善されていることがうかがえる。

「日本語運用能力が不足している外国人生徒」に対する指導方法については、本研究の対象とした学年に在籍していないことと、学校全体でも1名に減少していることから、研究成果を応用するところまで至らずに終わった。なお、次の評価方法の研究についても同様に対象とすることができなかった。

(2) 評価方法の確立

取組の内容

評価方法については、必要に応じて生徒に適した個別の支援を行いながら、全員の生徒に同じ基準で評価を行っている。しかし、現状では、評価は各教科内の裁量に委ねられることが多い。本年度はさまざまな支援を行いながら、生徒の主体性を伸ばしていくことを中心とした、ループリック形式での評価方法を研究した。ループリックを採用した理由は、文言化することで、教員と生徒が互いに目指す行動を共有することからである。また、これにより生徒自身が、期待される行動を具体的に想像でき、主体的な活動を促すこともできる。そして、主体的に学習に取り組むことができるようになれば、成績の向上に繋がるのではないかと考えた。以上の理由から、ループリック形式で評価を行う「My Guidepost」(巻末 **資料7**)を作成した。昨年度に作成した「自己目標マップ」(巻末 **資料8**)を本年度は「My Guidepost」と連動させながら実施した。

(c) 「My Guidepost」について

知識・理解やその活用といった観点以外で、生徒の活動を評価するために、ループリックを用いて活動を評価するものである。これを活用することで、生徒に主体的な学習とはどういったことかを明確にし、到達点を教員と共有することで、生徒の主体性を評価した。また、評価基準を明確にすることで、生徒自身が自己評価をしやすくし、主体的な学習における姿勢を自己修正できるツールとして活用できるようにした。

(d) 「自己目標マップ」について

「学習状況のチェック表」の分析結果から、対象生徒は「時間の管理」や「物の管理」に『困り』を持つことがわかった。そこで、生徒が自分自身で目標を立て、見通しを持って行動できるようにすることで、上記2項目が改善されていくのではと考えた。「自己目標マップ」を生徒たちに書かせることで、考査までの授業回数を認識させた。また、目標達成のために、毎時の自己評価を繰り返しさせることで、見通しを持って行動できるようにさせた。

なお、以下のような年間のスケジュールで取り組んだ。

6月上旬	* 全教職員へ取組についての説明。 ⇒ 研究内容と対象生徒を共有。本年度の展望を報告。
------	------------------------------------------------

6月下旬	<ul style="list-style-type: none"> * 評価方法の検討。 ⇒ 『困り』をもつ生徒が、学習方法の調整を自ら継続している点を評価できないか検討した。ループリック形式の評価方法について研究した。
7月下旬	<ul style="list-style-type: none"> * 全教職員へ評価方法を説明。 ⇒ ループリック形式の評価方法である「My Guidepost第1案」を説明。
8月下旬	<ul style="list-style-type: none"> * 評価方法の実施。 ⇒ 「My Guidepost第1案」を、対象生徒を含む学年で実施。
10月中旬	<ul style="list-style-type: none"> * 評価方法についての分析。 ⇒ 2学期中間考査の期間での「My Guidepost第1案」の結果を分析。 * 評価方法の実施。 ⇒ 「My Guidepost第1案」2回目の実施。
12月中旬	<ul style="list-style-type: none"> * 評価方法についての分析。 ⇒ 2学期期末考査の期間での「My Guidepost第1案」の結果を分析。 * 評価方法について中間報告。 ⇒ 「My Guidepost第1案」の実施結果を報告。 * 評価方法の改善。 ⇒ 生徒のアンケートにより、改訂した「My Guidepost第2案」の作成。
1月上旬	<ul style="list-style-type: none"> * 評価方法の実施。 ⇒ 「My Guidepost第2案」の3回目の実施。
3月上旬	<ul style="list-style-type: none"> * 評価方法のまとめ。 ⇒ 結果を分析，成果をまとめ。

本年度の取組としては、評価方法を新たに作成した。そして、年間で3回、生徒がつけた自己評価に、教員側の評価も取り入れた取組を行った。

2学期中間考査と2学期期末考査の間に行った第1案では、ループリック内の評価基準を文章で表した。できるだけ全教科で活用してもらえようにしたため、文言が抽象的であった。

しかし、生徒のアンケートから評価基準がわかりにくいという声が上がった。この課題を改善するため、ループリック内を箇条書きにし、活動をより具体的に表現した評価基準に変更した。

取組の成果

まず、「My Guidepost」について、2年生のコミュニケーション英語Ⅰの授業で試験的に評価値の変化を見ることで研究の取組を評価した。具体的には、「My Guidepost」を実施する前である1学期の対象生徒それぞれの評価値と学年全体の評価値平均との差を比較した。評価値とは、考査の素点と授業などの活動点から出した値である。

そして、「My Guidepost」を実施した後である3学期で、1学期のものと同様に、対象生

徒の学年平均との評価値の差を比較した。この3学期の評価値については、評価をつける際に、「My Guidepost」の点数を授業などの活動点に加味したものと、加味していないものの2つを比較した。次ページの表がその結果である。

学年の評価値平均に対する対象生徒の評価値の推移

対象生徒	1学期	3学期（無）	3学期（有）
A	16.7	13.1	16.1
B	4.1	11.2	15.1
C	-49.7	-2.5	5.6
D	-25.8	-6.6	-2.3
E	-16.9	-9.5	-2.1
F	-10.7	-6.1	-0.3
G	-13.4	-0.1	-2.3
H	10.7	1.1	1.0

表の中で、値が負になっているところは、対象生徒の評価値が学年の平均値よりも低いことを表している。

対象生徒の多くが、1学期と3学期を比較すると、学年の評価値平均に対する評価値が上昇している。成績の推移からは、生徒C、DやEなどは、「My Guidepost」を評価値に加味することで、大きく評価が上がっている。学年の評価値平均から大きく下回る生徒に対しては、「My Guidepost」を成績に加味することで、評価値が上がるのがわかった。

しかし、生徒GやHでは、「My Guidepost」を成績に加味することで、評価が下がる。これは、それぞれの生徒の特性を考えると、「自己目標マップ」を用いて、毎回の授業で振り返りをすることが苦手な生徒は「My Guidepost」では、低い評価になっている。

今後もさらに改良を加える上で、「自己目標マップ」と「My Guidepost」の連動をもう少し工夫する必要がある。

本年度の調査研究では、知識・理解やその活用といった観点以外に、生徒の学習に対しての主体的な活動を評価できるような評価規準の作成を目的とし、授業で活用した。

この「My Guidepost」を活用することで、昨年度の課題でもあった、指導方法を工夫・改善しても学習内容に定着が見られないなど、単位認定に支障がある生徒（本来高等学校には入学していないと考えられる発達遅滞等がある生徒など）についても、新たな評価方法を用いることで単位認定につなげることができるといえる。

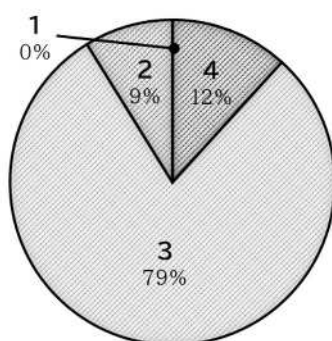
「My Guidepost」の運用について生徒たちがどのように捉えているかを調査するため、対象生徒を含む学年において4つの質問でアンケートを行った。次ページにその質問と集計結果を記載する。

質問①「My Guidepost」によって、『主体的に学ぶ姿勢』が具体化され、行動しやすくなりましたか。

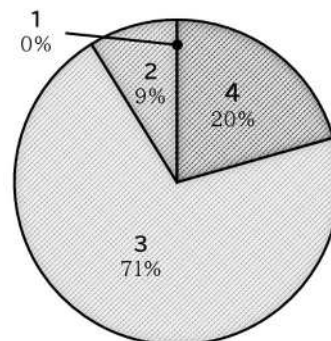
回答：強い肯定：4， 肯定：3， 否定：2， 強い否定：1

質問② 自己評価をすることで、自分の行動を振り返ることに役立っていますか。

回答：強い肯定：4， 肯定：3， 否定：2， 強い否定：1



質問①



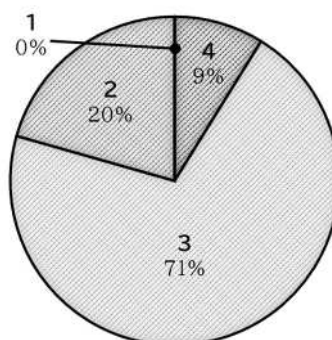
質問②

質問③「My Guidepost」は今後、より良い自分に成長するための“道しるべ”として役立っていますか。

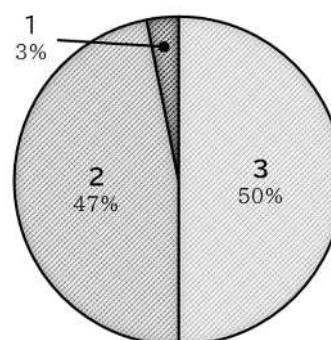
回答：強い肯定：4， 肯定：3， 否定：2， 強い否定：1

質問④「My Guidepost」を改善しました。前回と比べて、活用しやすくなりましたか。

回答：活用しやすくなった：3， あまり変わらない：2， 活用しにくくなった：1



質問③



質問④

これらの結果から、「My Guidepost」に対して、全体的に肯定意見が多いことがわかった。特に、①や②の回答において、肯定意見を持つ生徒が9割以上いた。①の回答において肯定意見が多かったのは、主体的に学ぶことの必要性を生徒たちは理解しているからではないかと考える。また、②の回答では、第1回目のアンケート（2学期末実施）ではやや否定的な意見が多かったが、今回は肯定的な意見が大幅に増えた。繰り返しの指導により、生徒たちが自分を振り返ることの大切さを感じ始めたようである。④では、ルーブリック内を箇条書きにし、活動をより具体的に表現した評価基準にしたことにより、活用しやすくなったと回答した生徒は半数だった。「My Guidepost」による評価点は1回目よりも平均が1.1ポイント上がっている。このことから、生徒たちが主体的に学習する態度が明確になり行動しやすくなったのではないかと考える。そして、③の回答からわかるように、8割の生徒が「My Guidepost」を

自分自身の成長に役に立っていると回答した。

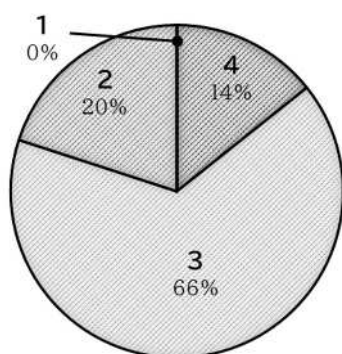
次に、「自己目標マップ」について、対象生徒を含む学年において5つの質問で生徒にアンケートを行った。以下にその質問と集計結果を記載する。

質問①「自己目標マップ」を記入するときに、今までの自分の行動を振り返ることは、目標を立てるために役立っていますか。

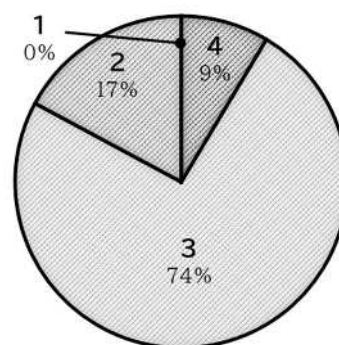
回答：強い肯定：4， 肯定：3， 否定：2， 強い否定：1

質問②「自己目標マップ」を記入するときに、目標を立てることは、より良い自分に成長するために役立っていますか。

回答：強い肯定：4， 肯定：3， 否定：2， 強い否定：1



質問①



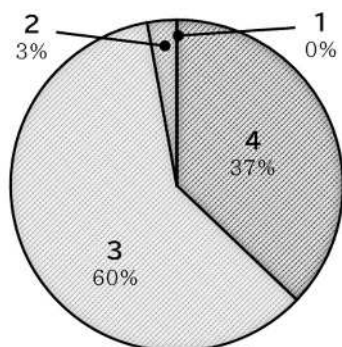
質問②

質問③「自己目標マップ」に記載されている考査までの授業回数を知ることは、見通しを立てて行動するのに役立っていますか。

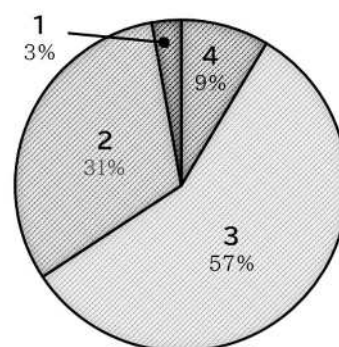
回答：強い肯定：4， 肯定：3， 否定：2， 強い否定：1

質問④「自己目標マップ」を記入するときに、毎回の授業で自分を評価することは、自分の行動の改善を図るために役立っていますか。

回答：強い肯定：4， 肯定：3， 否定：2， 強い否定：1



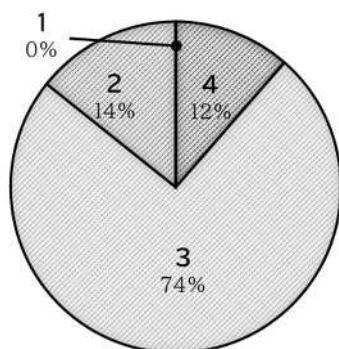
質問③



質問④

質問⑤「自己目標マップ」は今後、より良い自分に成長するために、そして見通しを立てて行動するために役立っていますか。

回答：強い肯定：4， 肯定：3， 否定：2， 強い否定：1



質問⑤

これらのアンケート結果から、考査までの授業回数を知ることが役に立つと答えた生徒はほぼ全員だった。見通しを立てやすいことは、生徒たちにとって学習しやすい環境であるといえる。また、全体的に肯定意見が多いが、④のように毎回の授業で自分を振り返ることについて、否定意見が多かった。「My Guidepost」のアンケートでは、自己評価をすることで、自分の行動を振り返ることに役立つと回答した生徒が多かったことから、毎回の授業で自分を振り返るということに対して負担を感じている生徒が多いと考える。これは、授業中に振り返る時間が十分に取れないなどの理由が挙げられる。主体的に学ぶ力を身につけるためにも、自分自身を振り返り、学習を調整することは大切であるので、生徒たちがより一層、振り返りを行いやすい工夫を重ねながら、今後も継続して行うことが必要であると考えます。

2 - 3 支援を支える教職員の知識・理解の深化

(1) 研修を通じた教職員の知識・理解の深化と意識の変革

取組の内容

様々な環境を背景に持つ生徒や特性のある生徒など生徒像が多様化している。そのような生徒たちの多様なニーズに応じるため、教職員の知識・理解の深化を図り、変化に柔軟に対応していくための情報を得る機会として研修を行った。

研修会は以下の4つの視点で実施した。

- ① 研究の方針、取組経過、結果を報告する。
- ② 生徒理解やS S T等の取組を情報共有する。
- ③ 外部講師を招き専門的な知識理解を深める。



④ 校内の専門職による情報提供。

以下に、調査研究期間中に実施した研修会等の記録を示す。

研修会等の記録

実施日	平成30年5月31日(木)
テーマ	教職員研修会(実行委員会より) 平成30年度1年生対象 第1回 KJQマトリックスの結果報告
内容	1年生対象に実施した第1回目のKJQマトリックスの結果について、どのように見るかという見方の理解と結果の分析(クラスごとの傾向等)を実施。また、生徒に対して取れる具体的手立て等についても検討。
実施日	平成30年8月29日(水)
テーマ	教職員研修会(実行委員会より) 1年生総合基礎(コーピング)に関する意見交流
内容	1年生を対象に本年度開始した総合的な学習の時間「総合基礎」について授業内容の共有と意見交流。
テーマ	第1回意識調査アンケートの結果報告
内容	学校生活についてのアンケート結果を教職員間で共有し、教育内容の向上や調査研究の改善を図る。
実施日	平成30年9月20日(木)
テーマ	教職員研修会 児童相談所との連携について
講師	三木 泉氏 本校SSW 十河 博子氏 本校SC
内容	「児童相談所とはどのような機関なのか」「どのような生徒が関係を持つことになるのか」「学校がどのように関わりを持つのか」等についての認識の深化を図る。
実施日	平成30年10月4日(木)
テーマ	情報共有・意見交流会(実行委員会より) 発達障がいがある生徒・不登校経験がある生徒の指導について
目的	学習指導方法の開発に当たり、対象生徒を絞ったうえで授業における状況や指導上工夫していることなどを共有・交流する。
実施日	平成30年10月12日(金)
テーマ	コンサルテーション
講師	竹田 契一氏 大阪教育大学名誉教授 大阪医科大学LDセンター顧問 京都市教育委員会指導部顧問
内容	『困り』がある生徒について、生徒の状況の見立てや対応等についての助言を受ける。
実施日	平成30年11月29日(木)
テーマ	教職員研修会 ソーシャルスキルトレーニングについて
講師	十河 博子氏 本校SC
内容	SSTについての理解を教職員間で深めることで生徒支援の向上に資する。

実施日	平成31年1月10日(木)
テーマ	情報共有・意見交流会(実行委員会より) 発達障がいがある生徒・不登校経験がある生徒の指導について
目的	10月の共有・交流の会以降の各生徒の指導状況について共有・交流する。
実施日	平成31年3月20日(水)
テーマ	教職員研修会(実行委員会より) 平成30年度1年生対象 第2回 KJQマトリックスの結果報告
内容	1年生対象に実施した第2回KJQマトリックスの結果について、第1回調査の結果からの変化、及び変化の理由についての分析を実施。また、コーピングの授業の生徒への効果についても検証する。
テーマ	教職員研修会(実行委員会より) 第2回意識調査アンケートの結果報告
内容	学校生活についての第2回アンケートの結果を教職員間で共有し、第1回の結果との比較等を行い、次年度以降の教育内容の向上や改善を図る。
テーマ	情報共有・意見交流会(実行委員会より) 発達障がいがある生徒・不登校経験がある生徒の指導について
内容	今年度の取組状況のまとめを共有・交流する。
実施日	令和元年6月13日(木)
テーマ	教職員研修会 気づきから始まる理解と支援 ～「発言や行動からの見取り」から「有効な手立て」へ～
講師	後野 文雄 氏 特別支援教育士スーパーバイザー 元京都教育大学客員教授
内容	通級指導を受講する生徒を中心に個々の生徒のコンサルテーションと講義を通し、生徒の見方や理解の仕方についての見識の深化を図る。
実施日	令和元年6月20日(木)
テーマ	情報共有・意見交流会 平成31年度1年生対象 KJQマトリックスの結果報告
講師	十河 博子 氏 本校SC
目的	1年生対象に実施したKJQマトリックスの結果について、その見方を理解すると共に結果を分析。さらに、生徒に対して取れる具体的手立て等を検討する。
実施日	令和元年7月19日(金)
テーマ	教職員研修会 起立性調節障害の病理理解とその対応
講師	水谷 翠 氏 北摂総合病院小児科医師
内容	既往症歴の中に目立つようになってきた「起立性調節障害」について知識を深め、生活習慣の乱れにつながっていきやすい「朝起きられない」についての理解につなげる。

実施日	令和元年9月19日(木)
テーマ	情報共有会(実行委員会より) 学習指導方法の確立に向けて 指導方法提案
目的	学習指導方法の開発に当たり、対象生徒を絞ったうえで授業における状況や指導上工夫していることなどを共有・交流する。
テーマ	情報共有会(実行委員会より) 意識調査アンケートの結果報告
目的	1学期に実施した意識調査アンケートの結果を共有して今後の課題等の理解を深める。

実施日	令和元年10月24日(木)
テーマ	教職員研修会 関係機関連携と社会資源の活用
講師	三木 泉氏 本校SSW
内容	複雑化している生徒の環境を、高校生が使用できる社会資源を使うことで、今後の支援の充実に生かす。SSWとの協働について、新たな知見を得ながら理解を深める。

実施日	令和元年12月5日(木)
テーマ	教職員研修会 学習指導方法の確立に向けた取組
講師	木崎 晴美氏 本校非常勤講師(日本語指導担当)
内容	日本語を母語としない生徒の学習指導方法について実施の状況と成果について情報を共有する。
テーマ	情報共有会(実行委員会より) 学習指導方法の確立に向けて 実施例等共有
目的	様々な『困り』を持つ生徒の学習指導方法について研究の進捗状況と実施例の共有をする。

実施日	令和2年1月23日(木)
テーマ	教職員研修会 進路状況と定着に向けた就労支援
講師	瀧本 佐都子氏 本校SCC
内容	本校の進路状況の情報共有と就職先への定着に向けた就労支援について知識の向上を図る。

実施日	令和2年2月6日(木)
テーマ	教職員研修会 気づきから始まる理解と支援 その2 ～「発言や行動からの見取り」から「有効な手立て」へ～
講師	後野 文雄氏 特別支援教育士スーパーバイザー 元京都教育大学客員教授
内容	6月の研修会の後、通級による指導を受講した個々の生徒の変容をもとにコンサルテーションを行った。個々のケースについて意見交流をすることで、生徒の見方や理解の仕方についての見識の深化を図り、今後の指導・支援につなげる。

実施日	令和2年3月19日(木)
テーマ	教職員研修会(実行委員会より) 本年度の研究まとめ報告
内容	研究の成果と課題について共有する。先進校視察報告をする。総合基礎・総合進路の取組を報告する。
実施日	令和2年7月30日(木)
テーマ	情報共有会 令和2年度1年生対象 KJQマトリックスの結果報告
講師	十河 博子氏 本校SC
目的	1年生対象に実施したKJQマトリックスの結果について、その見方を理解すると共に結果を分析。
実施日	令和2年7月31日(金)
テーマ	情報共有会(実行委員会より) 学習指導方法の確立に向けて 指導方法・評価方法提案
目的	「授業のチェックリスト」, 「My Guidepost」を独自に考案し指導する際の指針の1つとして提案。
実施日	令和2年9月15日(火)
テーマ	教職員研修会 「発言や行動からの見取り」から「有効な手立て」へ
講師	小谷 裕実氏 京都教育大学客員教授発達障害学科教授
内容	発達障がいのある生徒たちに対する理解を深め、実際に支援する際のポイントを学び、実践力を高める。
実施日	令和2年11月19日(木)
テーマ	教職員研修会 関係機関連携と社会資源の活用 ~本校の事例より~
講師	三木 泉氏 本校SSW
内容	生徒たちの『困り』に対する理解を深め、実際に支援する際の知識を学ぶとともに、外部機関との連携について理解を深める。
実施日	令和2年12月18日(金)
テーマ	情報共有会(実行委員会より) 学習指導方法の確立に向けて 指導方法・評価方法の共有
目的	「授業のチェックリスト」, 「My Guidepost」を授業で使用し生徒の変容の経過をグラフ化し、共有する。
実施日	令和3年1月21日(木)
テーマ	教職員研修会 通級による指導の取組
講師	平山 和美氏 本校LD等通級指導教室(通級)担当教諭
内容	本校の通級授業である「生活基礎」と「生活活用」の実践報告。

実施日	令和3年2月25日（木）
テーマ	教職員研修会（実行委員会より） 令和2年度 総合的な探究の時間「総合基礎」（1年生対象）及び「総合進路」（2年生対象）のまとめの報告
内容	「総合基礎」「総合進路」でのコーピングやSST等の実践報告をする。
実施日	令和3年3月9日（火）
テーマ	教職員研修会（実行委員会より） 研究成果の報告
内容	令和2年度及び3年間の研究成果の報告をして共有を図る。

取組の成果

視点①「研究の方針、取組経過、結果を報告する。」について

研究内容を全体で共有する場となった。生徒の学習状況の把握や授業の工夫につながる具体的な項目が示され参考になった。生徒自身が目標を持ち意欲的に学習に向かうための取組の様子が報告された。また、生徒、保護者、教職員対象の意識調査の結果や分析が報告された。

視点②「生徒理解やSST等の取組を情報共有する。」について

1年生を対象に、KJQマトリックスを入学時と学年末に実施している。意欲的に物事に取り組むための「こころの土台」を調査するものである。個人の変化やクラス全体の状況を見ることができ、情報共有することで指導上の配慮や工夫につながった。

「総合的な探求（学習）の時間」を1年生は「総合基礎」、2年生は「総合進路」として取り組んでいる。平成30年度から取り組み始め、内容や生徒の様子を報告している。グループワークやチームティーチングを取り入れクラス担任と共に取り組むことで、生徒理解を深められた。

平成31年度（令和元年）から「LD等通級指導教室」を開始し、一人ひとりの生徒の目標や学習内容について報告をした。生徒理解につながると共に「自立活動」について理解を進められている。

視点③「外部講師を招き専門的な知識理解を深める。」について

発達障がいや疾病について専門職による講義を受けた。初年度、2年目は発達障がいについての基本的な知識を得ると共に、生徒の姿をどう見るか、『困り』をどうとらえるかという視点を養うこととした。3年目は2つのケースについて具体的な研修を行った。事前にプロフィールや現在の様子をまとめ、講師と情報共有しておき研修に臨んだ。研修の場ではクラス担任や授業担当からも意見を求めながら、生徒の見方や指導の仕方について深めていった。生徒の『困り』は指導者の『困り』でもあり、具体的なケースで話し合うことで個々のケースに合った指導方法についてより深めることができた。

視点④「校内の専門職による情報提供。」について

本校には専門職として、SC、SSW、SCCが配置されている。また、日本語指導教員の配置もある。各々がどのような役割を担い、どのように生徒と関わるのか具体的な内容を報告し情報共有した。今後、生徒の『困り』に際し連携するイメージを持つことができた。

現在、日本語指導教員は1名の生徒の学習支援を担っている。日本語能力や学習言語の力など個の状態に応じて細やかな支援が行われていることについて情報を共有できた。

これらの研修を通して、対象とする生徒だけでなく生徒全般を視野に入れて専門的知識の習得に前向きに取り組む姿勢がみられるようになった。教職員の入れ替わりがあっても知識・理解の深化の場面において、肯定的にとらえ前進しようという意識の変革がみられた。また、校内に配置されている専門職との連携も情報の周知とともに広がってきている。

社会状況の変化とともに生徒の置かれた状況も変わり、『困り』の内容も多様なものになることが予想される。今後も研修・研鑽を止めることなく生徒に寄り添い、支えていきたい。

(2) 先進校視察による教職員の知識・認識の深化

取組の内容

発達障がいのある生徒の支援、不登校経験のある生徒の学び直し、自立につながる職業訓練、学力保障などに取り組む先進校を視察した。高等学校で新たに実施する「LD等通級指導」に関する先進校も視察対象とした。

以下に、調査研究期間中に訪問した視察校の記録を示す。

視察校の記録

訪問日	平成30年10月18日(木)
視察校	西日本短期大学付属高等学校
目的	発達障がいに関する診断があることが条件の発達支援クラスの視察
訪問日	平成30年10月19日(金)
視察校	長崎玉城高等学校
目的	学び直し、職業訓練などを実施している学習指導方法の取組の視察
訪問日	平成30年12月11日(火)
視察校	神奈川県立横浜翠嵐高等学校
目的	日本語運用能力が不足している外国人生徒の学習指導方法の取組を視察
訪問日	平成30年12月12日(水)
視察校	東京都立蒲田高等学校
目的	学び直しと新たな能力の育成について全校で授業規律の確立に取り組む指導の視察
視察校	神奈川県立釜利谷高等学校
目的	学び直しを目的に学力検査を実施しない選抜制を取り入れた指導方法の視察
訪問日	令和元年10月16日(水)
視察校	兵庫県立西宮香風高等学校
目的	学力保障のための指導方法及び通級指導の実際について視察
訪問日	令和2年2月21日(金)
視察校	長野県箕輪進修高等学校
目的	学力保障のための指導方法及び生徒の実態把握のための取組を視察

取組の成果

指導方法の学びとそれに着手するまでの生徒の実態把握の効果的技法を学ぶことができた。また、視察校の情報を共有する機会を設け、知識の深化となった。しかし、視察校は少なく参加教職員も限られているため、今後も刺激を受け研鑽する機会が更にあるとよい。

各校の技術や方法を知ることはできたが、場所や時間割の事情を鑑みるとそのまま取り入れることは難しい。視察校の取組を参考にしながら本校での取組をより良いものにしていきたい。

IV 調査研究の成果(まとめ)

1. 目標1「学習態勢確立のための支援方法及び支援体制の具体的策定」に対する成果

(1) 支援体制のシステム化

平成28年度より取り組んできた調査研究において、SC(週当たりおおよそ2日勤務)とSSW(週当たりおおよそ1日勤務、令和2年度より週当たり2日勤務)という専門職と協働して生徒の『困り』を解消する支援に取り組んできた。

比較的なじみのあったSCとの協働はともかく、初めて協働するSSWとの関係は順調に進んできたわけではなかった。5年の間に色々な改善と工夫を加えながらようやく校内のスタッフとしての意識が醸成されてきた状況である。

原級留置や進路変更を未然に防ぐために、生徒の『困り』を解消して学校に定着させるための校内の組織や協働の在り方などの体制は、おおよそ以下のような最終形態の完成に至った。

情報共有(第一段階)

名称：支援委員会

開催：原則として週当たり1回開催

構成：副校長「支援コーディネーター(教育支援部長・総合育成支援教育主任)」

生徒指導主事 保健主事 養護教諭 SC SSW

学年の担任代表各1名

※ 従来、情報共有の場でありながら、課題に対する具体的な方策にも話が及ぶことが多かった会議を、情報共有の場として限定。対策はケース会議で検討するように徹底した。

情報共有(第二段階)

支援委員会の記録閲覧

毎回の支援委員会終了後閲覧可能に

全教職員への情報共有の方法として、

* PCサーバ内に保存した記録ファイル(パスワード付き)を平易に閲覧できるようにする。

* 閲覧への意識を高めてもらうためメール配信によるアナウンスを行う。

に取り組み、改善とスピードアップを図った。

具体的な生徒支援プラン等の策定

名称：ケース会議

開催：事案の必要に応じて適宜開催

構成：副校長「支援コーディネーター(教育支援部長・総合育成支援教育主任)」

その他、必要に応じた関係教職員

(2) 「支援コーディネーター」の役割

支援に関わるコーディネーター（校内呼称「支援コーディネーター」）についてもこれまでの経緯を踏まえ、位置付けを整理するとともに、役割の改善を行った。さらに、特別な力量を備えた教員でなくとも担えるよう、その役割の文章化に取り組んだ。

位置づけの確定

「特性による『困り』を抱える者」または「家庭環境・生活環境に関して『困り』を抱える者」の直接支援を行う教職員（クラス担任や教科担当等）の活動を、校内の各分掌及び教職員、SCやSSWといった専門職と協働しながら多面的に支え、調整する者とする。

役割の確定

支援委員会の主催・進行

SC・SSWとの情報交流・仕事の調整

生徒支援プランの原案作成

※ 支援プラン

特別支援・・・・・・・・・・個別の指導計画（個の課題に応じた指導計画）

家庭環境・生活環境の困り・・・・・・・・アセスメントシートと支援計画

生徒情報・生徒支援プランの共有システム管理

※ 情報収集先

新生児・・・・・・・・・・中学校訪問・入学前面談・児童相談所

年度途中・・・・・・・・・・支援委員会及び教科担当者

生徒支援プランの評価及び改善計画立案

(3) 生徒支援プランの評価方法の策定

特定の生徒に対して作成する「個別の指導計画」に関するPDCAサイクルについての文章化に取り組み、それに基づいて実際の指導を行った。また、ケース会議で使用する「アセスメントシート」と「プランニングシート」についても過去のものから改良をし、より利用しやすくするとともにPDCAサイクルの文章化に取り組んで実践した。

「個別の指導計画に関するPDCAサイクル」

◎ 書式の見直し・作成

個別の指導計画のプロフィールシート

『入学時に収集した情報』を基に作成。

個別の指導計画様式1

『生徒の実態（気になる状況）』、『配慮の内容』及び『自立支援・キャリア指導の履歴』を記入。

個別の指導計画様式2

『本人・保護者の長期・短期目標』と『各教科の具体的な支援計画』を記入。

◎ Plan

- ① 担任団が、学校での状況をもとに候補となる生徒をピックアップ（5月下旬まで）
- ② 支援委員会が、対象生徒を決定（6月中頃）
- ③ 教育支援部が、プロフィール部分を作成（6月中頃まで）
- ④ クラス担任が本人・保護者との三者懇談を経て、「様式1」と「様式2」の長期・短期目標を作成（7月）
- ⑤ 各教科担当者が、「様式2」の教科の指導計画を記入（7月末まで）

◎ Do

- ① 計画に基づき、2学期から指導開始（9月～）
- ② 【中間 Check】指導と対象生徒の変容をふりかえり、計画を見直す（12月）
- ③ 修正をした計画で指導を行う（1月～）

◎ Check

- ① 指導をふりかえり、対象生徒の変容を記録（年度末）
- ② 次年度の計画立案（年度末）

◎ Action

- ① 前年度に立案した計画をもとに指導（次年度）

以降、繰り返し。

「アセスメントシート・プランニングシートに関するPDCAサイクル」

◎ Plan〔家庭環境・生活環境への『困り』を抱える生徒への対応（随時）〕

- ① 問題状況発覚後、情報を収集し、アセスメントシートを作成
- ② ケース会議で、アセスメントシートをもとに支援計画を作成
- ③ 継続ケース会議の日程決定

◎ Do

- ① 計画に基づき役割分担されたものが個々の対応

◎ Check

- ① 継続ケース会議にて、状況の変容を確認
- ② 計画を調整

◎ Action

- ① 新たな支援計画を実行

以降、繰り返し。

(4) ソーシャルスキルトレーニング

1年生と2年生の総合的な探究の時間における取組をさらに改善し充実させてきた。このように、1年次からSSTを取り入れてきたことにより、他の教科・科目の授業におけるグループワークやプレゼンテーションがスムーズになるなど、コミュニケーション能力の向上に一定の効果が表れている。

2. 目標2「学習指導方法と評価方法の確立」に対する成果

調査研究の初年度（平成30年度）に、「発達障がい診断を受けている生徒」と「不登校の経験により未学習があると考えられる生徒」の中から各5名の対象生徒を抽出し、指導事例の収集を行うことで学習指導方法の開発に繋げることを目指した。

その経験をもとに2年目となる昨年度より生徒の変化の様子を具現化するためのチェック表等を活用して研究を進めた。対象生徒は新たに新入生の中から選び直した。

最終年度となる本年度は、2年生となった対象生徒について、引き続きチェック表等の活用を試行した結果について評価を行った。

(1) 学習状況のチェック表

「学習状況のチェック表」を用いて、発達障がいがある生徒と中学校までに不登校を経験した生徒の中から対象として選んだ生徒について、「書く」・「話す」・「聞く」・「切り替え」・「時間の管理」・「物の管理」の6項目でどのように変容しているのかを調査した。

その結果、全体的に、入学当初と比べてほとんどの項目で上昇が見られた。特に、「聞く」、及び「時間の管理」という項目においては、入学当初と比べると大きく上昇している。「聞く」では、生徒がイメージを持ちやすいような工夫（ICT機器の活用など）を行うなど、教職員が多面で工夫・支援を行ったことにより、生徒の『困り』が改善されたひとつの要因になったと考える。なお、本年度は新型コロナウイルス感染症の感染予防のために、ペアワークやグループワークを行うことが難しく、発表などの活動が少なくなった。そのため、「話す」という項目が入学当初よりあまり変化していないのではないかと考える。

(2) 授業のチェックリスト

昨年度から、生徒たちにとって学びやすい環境を作るために、「授業のチェックリスト」の記入を教員に依頼し、授業の工夫や意識について調査するだけでなく、指導方法の提案を行ってきた。昨年度の課題として、リストの項目数が多く、運用が不十分であったことを踏まえ、本年度は、項目数を精選し、より運用しやすいものに改良した。

その結果、「授業のチェックリスト」についての実施率が昨年度よりも上昇しただけでなく、項目ごとにも指導方法が活用できているという人数が増加していた。このことにより、多くの教員が様々な支援・指導を行う意識が高くなっていると考えられる。特に「聞く」においては、昨年度よりも大幅に実施率が増加しており、教員が意識して取組を行っていたことがうかがえる。多くの教員がユニバーサルデザインの観点を持ち、様々な工夫をして授業に取り組んでいることが確認できた。

(3) 自己目標マップ

「学習状況のチェック表」の分析結果から、対象とした生徒は「時間の管理」や「物の管理」に『困り』を持つことがわかった。

これらの2項目の改善のためには、生徒たちが自分自身で目標を立て、見通しを持って行動できるようにすることが必要なのではないかと考えた。そこで、「自己目標マップ」の作成を取り入れて、目標達成に向けて毎時の自己評価を繰り返し行い自ら学習を調整することと、見通しを持って粘り強く学習を続けるために考査までの授業時間数の認識をさせることを目的とした。

アンケート結果より、全生徒が考査までの授業回数を知ることが役に立つと回答しており、見通しを立てやすくすることは、生徒たちにとって学習しやすい環境に繋がっているといえる。

さらに、次項の「My Guidepost」の学びへの動機と関連付けた考察を行った。結果として、振り返りをするのが苦手な生徒は「My Guidepost」の点数を加味すると評価が低くなることがわかった。毎回の授業で自分を振り返るということに対して負担を感じている生徒が多いと考える。しかし、主体的に学ぶ力を身につけるためにも、自分自身を振り返り、学習を調整することは大切であるので、生徒たちがより一層、振り返りを行いやすい工夫を重ねながら、今後も継続して行うことが必要であると考えた。

(4) My Guidepost

「My Guidepost」を、知識・理解やその活用といった観点以外に、生徒の学習に対しての主体的な活動を評価できるような評価規準として、新たに授業で活用した。

これを活用することで、主体的に学習するということがどういったことなのかを明確にし、到達点を生徒たちと教員が共有することで生徒の主体性を評価することができた。

評価基準を明確にすることは、生徒自身が自己評価をしやすくなり、学習における主体的な姿勢を自己修正できるツールになった。

「My Guidepost」を評価に加味した場合、対象生徒の評価はどのように変化するかを調査した。対象生徒の内、75%の生徒が「My Guidepost」を評価に加味すると評価値が上昇した。このことから、昨年度の課題でもあった、指導方法を工夫・改善しても学習内容に定着が見られないなど、単位認定に支障がある生徒（本来であれば高等学校には入学していないと考えられる発達遅滞等がある生徒など）について、新たな観点を導入して評価するのではなく、「My Guidepost」を活用して“新たな評価方法”を用いることが、単位認定につながるひとつの方法であることを確認できたといえる。

3. 目標3「支援を支える教職員の知識・理解の深化」に対する成果

本調査研究だけでなく、それ以前の平成28年度からの調査研究を実施していた時点から通して、外部から講師を招いての研修会や、京都府外で様々な特徴的取組をされている高校を訪問しての視察を重ねてきた（令和2年度はコロナ禍の影響があり視察はできなかった）。

これらの研修会に日々の教育実践や経験を加えて、教職員の知識と理解は深まり、生徒の支援に対して、高い意欲を持って取り組もうとする教職員も増えてきた。生徒についての見方や対応には大きな変化が表れていると考える。

今後もこの調査研究で得られた知見をもとに、本校なりの実践につなげていける素地はできたものとする。

4. 調査研究の評価基準となる指標による評価

次の2つを指標として調査研究の評価を行うこととした。

A 生徒の進級率・欠席日数・評定平均値等の数値

B アンケートによる意識調査

Aについては、学習指導方法や評価方法の適否とともに、生徒の『困り』を解消して学習態勢が構築できているか否かの評価に使用した。

Bについては、教職員の達成感の向上と負担感の軽減、生徒及び保護者の学校への信頼感などを評価することで、Aと併用して生徒の学習態勢を整える校内体制構築の達成状況の評価に使用した。

(1) 生徒の進級率・欠席日数・平均評定等による評価

平成30年度より令和2年度までの3年間について、生徒の変化の様子を検証するために数値化できるものとして

- ① 生徒の進級率
- ② 欠席日数
- ③ 評定平均値
- ④ 「勉強会」への参加率

を対象とし、SC及びSSWとの協働の成果が上がることによって、①・③・④については向上することを、②については減少することを期待した。

※「勉強会」とは、数学及び英語について学力低位者を対象とする学習会の呼称。小学校・中学校段階の内容の学び直しから始めて、高等学校での学びに対応できるよう学習を積み重ねる教育課程外の学習時間。両教科について、それぞれ週当たり1回、始業前に40分程度実施している。

生徒の進級率

* 3年間について、1年生の進級率は下表のとおりである。

1年生 進級率（進級人数/在籍人数）

年度	平成30	令和元	令和2
全体（進級人数/在籍数）	75.9% (41/54)	79.2% (42/53)	91.3% (42/46)
新入生（進級人数/在籍数）	81.6% (40/49)	85.1% (40/47)	92.9% (39/42)
内、長欠生（進級人数/在籍数）	90.9% (10/11)	88.2% (15/17)	100.0% (13/13)
原級留置生（進級人数/在籍数）	20.0% (1/5)	33.3% (2/6)	75.0% (3/4)

※ 長欠生：長期欠席者特別入学者選抜（不登校生徒を対象とした選抜）による入学生。

* 調査研究を始めた平成30年度以降、進級率の向上が認められる。

* このデータだけからでは判断しきれないところもあるが、SC及びSSWとの協働により、

生徒の学校生活での『困り』の解消とともに、個々の生徒の学習ニーズに応じた指導方法の改善が進み、確立してきたことによる成果として進級率が向上してきたものとする。

欠席日数

* 3年間について、1年生の月別欠席日数（各生徒の月ごとの欠席日数の合計）は下表のとおりである。ただし、この欠席日数の中には

事情があって休学している生徒の欠席日数も含まれている。

なお、年度ごとに在籍生徒数は異なり、年度当初の生徒数は、

平成30年度：54名

令和元年度：53名

令和2年度：46名

であるため、単純な比較はできないことを断っておく。

※ 令和2年度の4月と5月は、新型コロナウイルス感染症拡大対策のため、緊急事態宣言発令により休校であったため、データはない。

※ 令和2年度は、発熱等風邪症状について出席停止の措置をとっている。

* 在籍生徒数の差異があったとしても、年度当初の欠席日数は、調査研究を始めた平成30年度から年度ごとに減少している。欠席日数が減少しているということは、個々の生徒の『困り』の解消に向けた働きかけや対応が一定の成果を上げてきたと考えられ、体制が整ってきたことを表していると見て取れる。

1年生 月別欠席日数

年度	平成30	令和元	令和2
4月	89日	43日	—
5月	206日	73日	—
6月	215日	165日	11日
7月	92日	66日	25日
9月	209日	136日	117日
10月	240日	170日	55日
11月	249日	148日	67日
12月	157日	96日	39日
1月	163日	131日	43日
2月	147日	102日	70日
3月	74日	22日	26日

1年生 学年末評定の平均値

評定平均値

* 3年間について、1年生の各科目の学年末評定の平均値は右表のとおりである。

* 調査研究を始めた平成30年度から年度ごとに、全ての科目で評定の平均値が向上してきた。

* 年度によって新入生の学力の違いは大きいこともあり、この結果のみをもって、生徒の『困り』の解消を目指した協働の成果であると判断することはできないが、本研究では評価方法の研究にも取り組んでおり、各教員の評価に

年度	平成30	令和元	令和2
国語総合	2.4	2.8	3.5
現代社会	2.6	2.8	4.0
数学 I	2.6	2.8	3.3
生物基礎	2.9	3.0	3.7
体育	2.7	3.4	3.8
保健	2.6	2.8	3.1
美術 I	3.1	3.0	4.0
書道 I	3.0	3.3	3.5
コミュニケーション 英語基礎	2.5	2.8	3.5
社会と 情報	2.9	3.1	4.0

関する意識が向上し、生徒の学習成果や到達状況に対するより細かな対応がされるようになった結果と考えることができる。

- * 生徒が自身の学習状況や学習成果について振り返り、自己を評価することで、主体的に学習に取り組む態度を育成する取組が進められ、生徒が前向きに学習に取り組む体制が出来ている成果とも考えられる。

「勉強会」への参加率

- * 3年間について、「勉強会」への参加率（参加生徒数/対象生徒数）は下表のとおりである。

- * いずれも対象生徒数は学期により変動があるが、おおむね10名～15名程度である。平成30年度から年度ごとに参加率が増加している。

1年生「勉強会」への参加率

年度	平成30	令和元	令和2
数 学	20.4%	28.5%	51.0%
英 語	30.6%	39.9%	60.1%

- * 生徒が学習に対し、前向きに取り組む姿勢がうかがえる。定期考査前などの放課後に、教室に残って学習する生徒は増加しているが、平成30年度と令和元年度の参加率は低く、参加を促す方法等に課題があった。
- * 令和2年度に「勉強会」の参加率が大幅に上昇している。各教員から生徒の学習成果や到達状況に対してより細かな指導がされ、生徒が前向きに学習に取り組む体制が表れた結果と考えられる。また、この1年生は、本校への最後の入学生であり、生徒、保護者ともに学習に対する意識は高く、「勉強会」への積極的参加を呼び掛けたことも要因に挙げられる。

考察

- * 以上の各指標のデータから、教員については

- 評価に対する意識
- 生徒の学習成果と到達状況を細かに汲み取る意識

が高まったと見取ることができる。

一方、生徒については

- 自分自身の学習状況や学習成果について振り返る意識
- 主体的に学習に取り組む態度

が育成されたと見取ることができる。

本研究で取り組んできたことの成果が表れていると判断できると考える。

(2) アンケートによる意識調査による評価

教職員、生徒、保護者の意識を調査するため、調査研究の初年度（平成30年度）より毎年度、第1回を6月または7月頃、第2回を12月または1月頃と、年2回のアンケート調査を実施してきた。質問項目は毎回同じものとして、比較を行っている。概ね、各年度とも第1回の結果より第2回の結果が向上する傾向であった。

ここでは、最終年度の研究成果を検証するために、平成30年度の第1回アンケートの結果と令和2年度の第2回アンケートの結果を比較する。

教職員対象アンケート

研究1年目 第1回 実施日：平成30年6月20日（回答数21）

研究3年目 第2回 実施日：令和3年1月15日（回答数24）



強く思う



思う



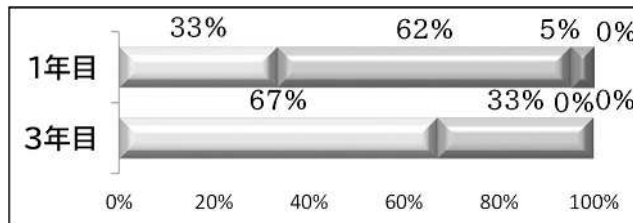
思わない



強く思わない

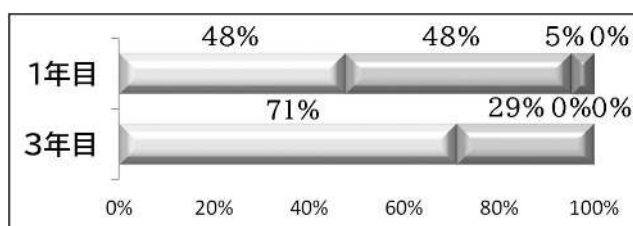
設問1. 支援教育を推進しようという教職員の意識は高い。

3年目では、支援教育を推進しようとする意識が全教職員に認識されている。中でも強い肯定意識を持つ教職員が倍増し、半数以上になったことがわかる。



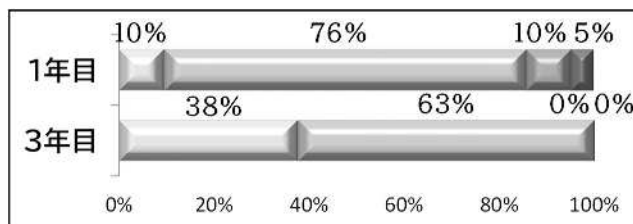
設問2. 教職員に対して支援教育に関する理解啓発が進められている。

強い肯定感を持つ教職員が増え、全教職員に肯定意識がみられることから、理解啓発が適切に行われており、浸透していることがわかる。



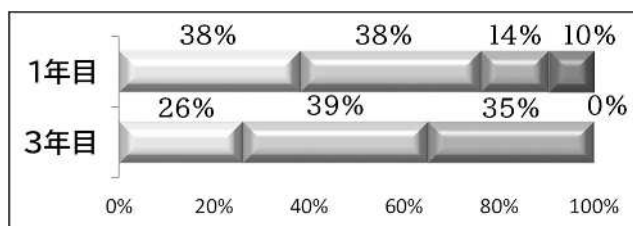
設問3. 学校で行っている支援は、生徒の教育的ニーズに応えられている。

生徒の教育的ニーズに応えられていると強く考える教職員の割合が約4倍になっている。総合育成支援員の複数配置や教科でのチームティーチングなどが効果を上げていると考えられる。



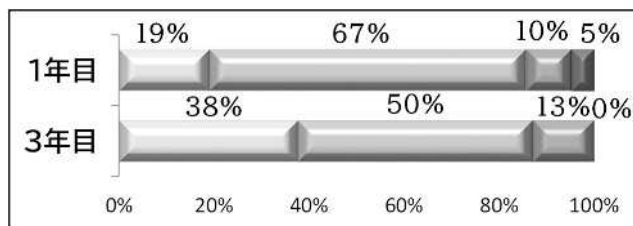
設問4. 授業をするうえで、生徒が抱える事情（学力不振、LD等）に伴って生じる負担感がある。

負担感を強く持つ教職員の割合は減少しているが、65%の教職員が負担感を持っている。また全く負担感を持たない教職員はいなくなった。この負担感を減らすための何らかの手立てを検討する必要があると考える。



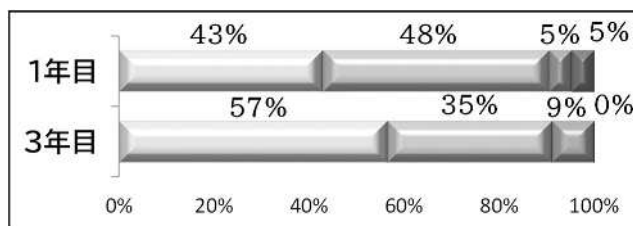
設問5. 支援教育においては、負担に感じることもあったとしても、達成感を持てる場合もある。

達成感を持つことができると思う教職員は2倍に増加している。前問から負担に感じている教職員は多いことがわかったが、この設問からは達成感も感じている教職員が90%近くいることがわかる。



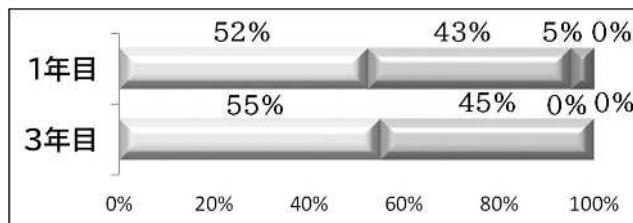
設問11. SC・SSWとの協働は、支援教育の充実に役立つ。

強い肯定感を持つ教職員が増えている。また、9割以上の教職員が専門職との協働は支援教育の充実に役立つと捉えている。



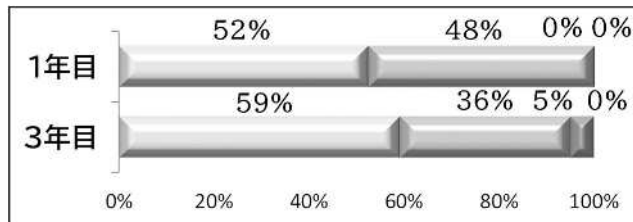
設問12. 教室の環境を整え、生徒が落ち着いて授業を受けられるようにしている。

生徒が落ち着いて授業を受けられるよう、教室の環境が整っていることがうかがえる。携帯電話のマナー指導や視覚教具を取り入れた授業への転換などによる成果の表れではないかと考える。



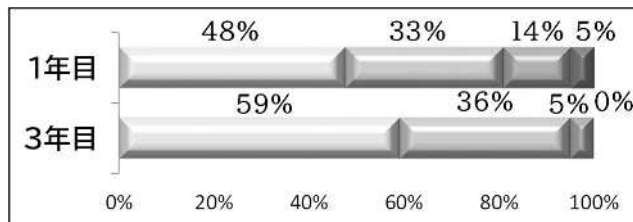
設問13. 授業の中で、工夫した教材(ワークシート等)を用いて学習しやすいようにしている。

大きな変化はないが、ほとんどの授業で、生徒が学習しやすいように教材を工夫されていることがわかる。今後も、この工夫を共有できるようなツールを作ることが必要であると考ええる。



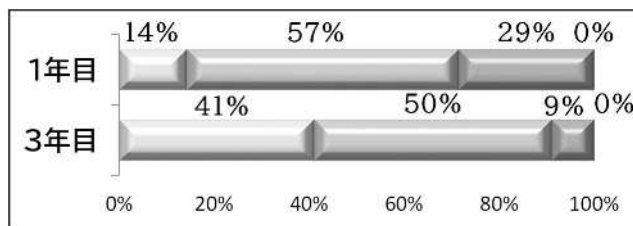
設問14. 授業において、視覚に訴える教具(プロジェクタやタブレット等)を使用した工夫をしている。

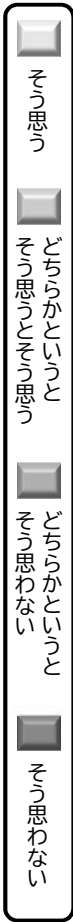
概ね、視覚効果を利用した授業が行われていたが、さらに積極的に工夫されていることがわかる。これはタブレット(iPad)、プロジェクタや電子黒板などが整備され活用されている結果の表れと考える。



設問15. 授業以外の学習指導(補習、自宅学習課題等)において、特別な教育的支援が必要な生徒も学習しやすいような工夫をしている。

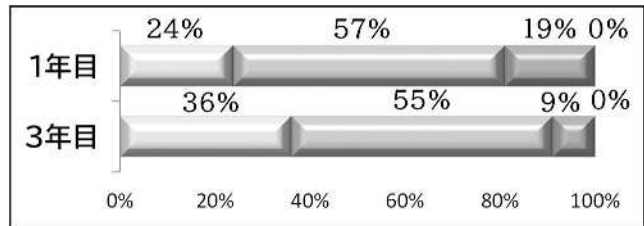
強い肯定感を持つ教職員が約3倍に増えている。授業以外の学習指導での工夫が難しいと感じている教職員は3割から1割に減った。本年度は、コロナ禍での課題作成の取組で工夫がなされたと考ええる。





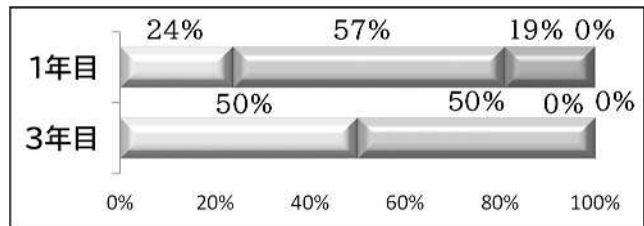
設問16. 授業および授業以外の学習指導において、生徒個々のニーズに応える指導方法を取り入れている。

強い肯定感を持つ教職員が増えており、また、生徒個々のニーズに応える指導方法を取り入れることが難しいと考えている教職員は半減している。指導方法の共有が適切に行われたことが、ここでもうかがえる（設問10. 参照）。



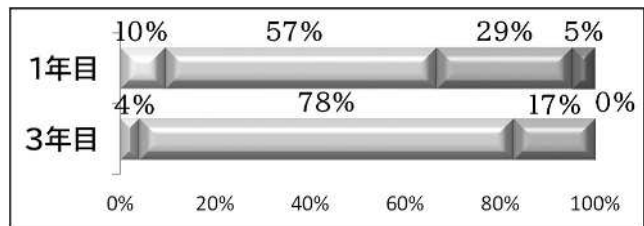
設問17. 特別な教育的支援を必要とする生徒の理解を促すために、教材・教具等を工夫している。

強い肯定感を持つ教職員が2倍以上に増えた。また、多くの授業で教材・教具等の工夫がされるようになったことから（設問13.・14. 参照）、特別な教育的支援を必要とする生徒のための教材・教具等の工夫が、全ての教職員において取り組まれるようになったと考える。



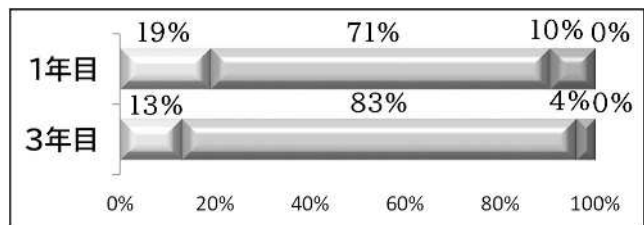
設問18. 生徒に学習意欲があると感じる。

否定的な感想を持つ教職員は半減している。否定的な感想の原因が何かを考察し、対策を考えた取組の成果が現れつつあると考える。さらに、生徒への「学習への動機づけ」を考えた取組を継続していかなければならない。



設問19. 生徒が学校生活に満足していると感じる。

概ね、教職員は肯定的に感じている。さらに、その割合は増えている。前問を踏まえて見ると、生徒たちは学習面以外で学校生活を満足して送っていると感じている教職員が多いのではないかと考える。



教職員全体を通しての考察

* 研究1年目（平成30年6月20日実施）より研究3年目（令和3年1月15日実施）のアンケートの回答数が14%増えている。本校で行っている支援教育が適切に理解・推進され、全教職員が意識・理解をしていると考えられる。

- * さまざまな授業において、教材・教具等の工夫がされている。共有することで、生徒により良い学習環境を提供できる体制が整いつつある。特に、特別な教育的支援が必要な生徒に対しての教材・教具等においては、更に研究していくことが必要である。
- * 学習意欲がない生徒に対し、その原因の追究や学習意欲の向上を図る方法を模索し検討することが、引き続き大きな課題として挙げられる。

生徒対象アンケート

研究1年目 実施日：平成30年6月（回答数117/在籍数127）

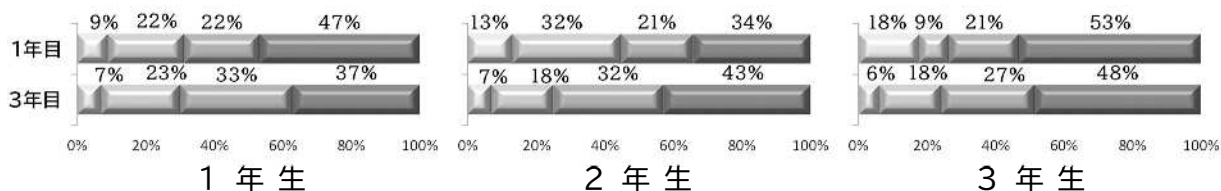
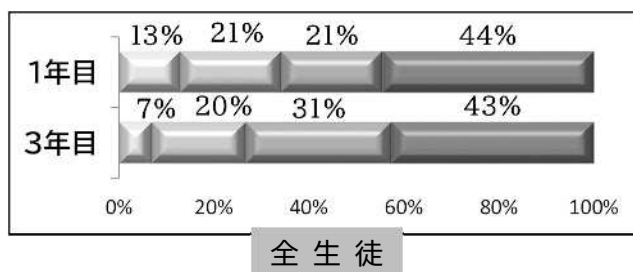
（学年別回答数 1年：45/2年：38/3年：34）

研究3年目 実施日：令和3年1月（回答数120/在籍数124）

（学年別回答数 1年：43/2年：44/3年：33）

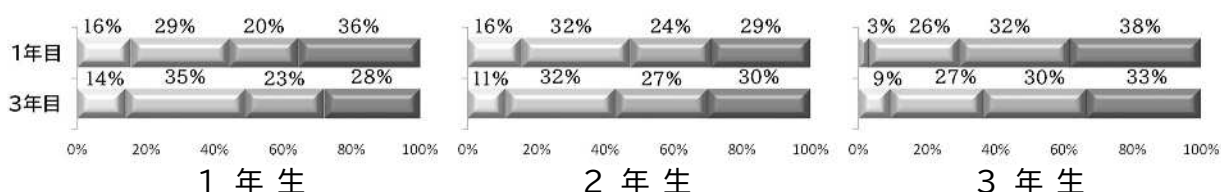
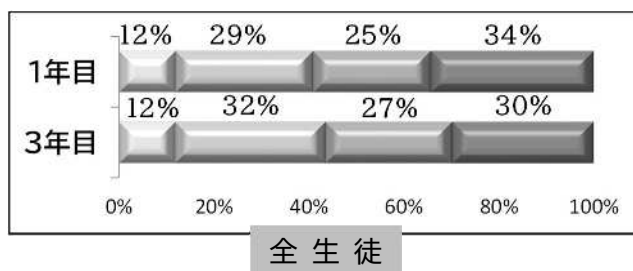
設問1. 文章を読むときに困ることが多い(例 語や行をとばして読んでしまう。繰り返し読んでしまう。など)。

読むことに対して『困り』を感じる生徒が減少していることから、さまざまな工夫や支援の結果であると考えられる。また7割以上の生徒が読むことに対して、『困り』を感じていない。



設問2. 話をするとき困ることが多い(例 思ったことをすぐ話してしまう。自分の気持ちを言葉にして伝えるのが苦手。など)。

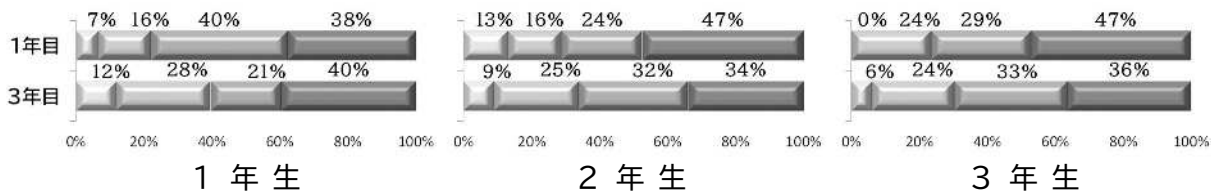
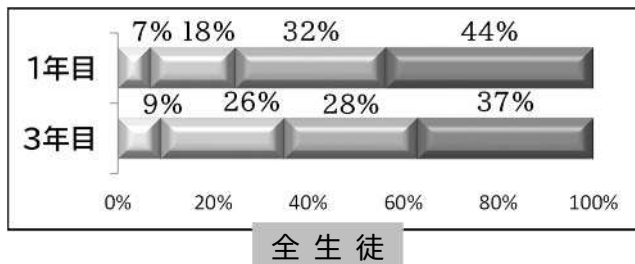
全体では、話すことに対して『困り』を感じる生徒の数にあまり変化はみられないが、3年前の入学時に比べ3年後にはコミュニケーション力が少しずつ身についていると考えられる。(研究1年目の1年生と研究3年目の3年生の比較)



設問6. 気持ちをコントロールするのに困ることが多い(例 人ごみの中にいることが苦手。つい

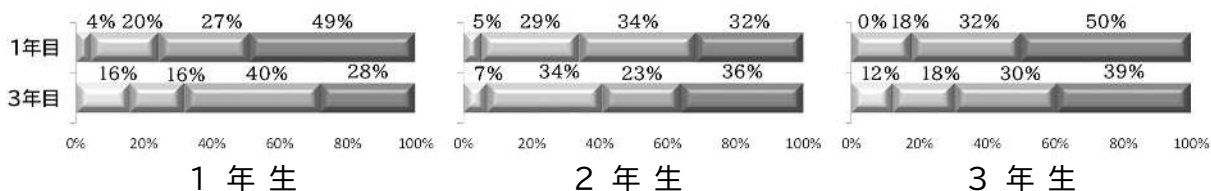
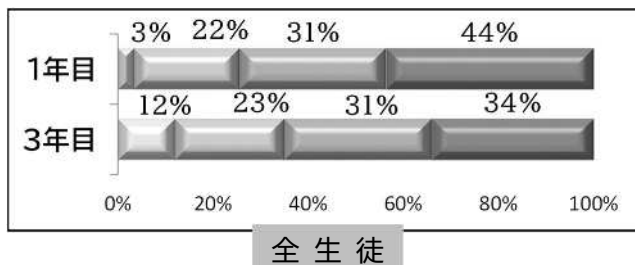
カッとなり感情的になる。など)。

近年、支援教育を求めて入学する生徒が増えている。『困り』がある生徒の割合は、学年が上がるごとに解消傾向にある。これは、コミュニケーション力が少しずつ身につけてきている(設問2. 参照)ことや、自己理解が深まったことによる結果と考える。



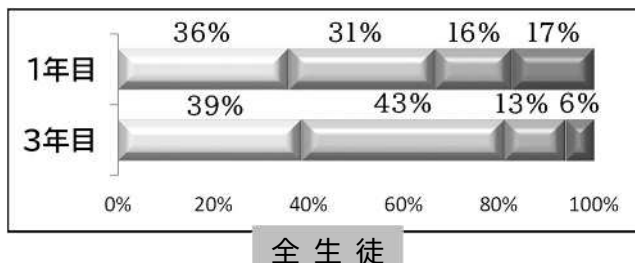
設問7. 複雑なことを理解するのに困ることが多い(例 一度に二つ以上のことを言われるとわからなくなる。野球・サッカー、集団ゲームなどのルールを理解することが苦手。など)。

全体的に、複雑なことを理解することに対して『困り』を感じている生徒の数が増えている。この原因を追究し、適切な支援を行う必要がある。



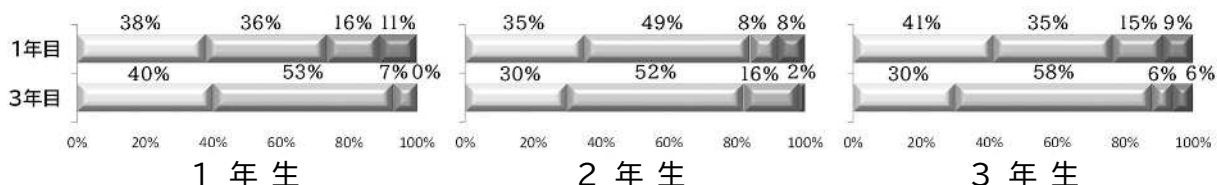
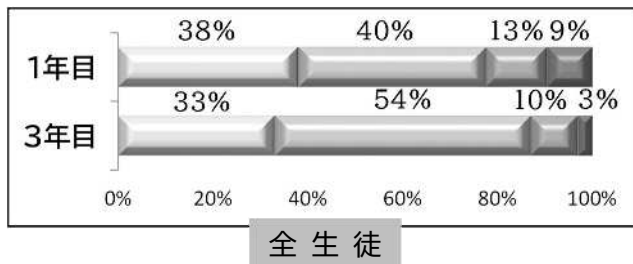
設問8. 落ち着いて受けることができる授業が多い。

落ち着いて授業を受けることができる生徒の数が、6割程度から8割程度まで増えている。『困り』を抱えていながらも授業での様々な工夫された取組による成果であると考えられる。



設問9. わからないことがあると、ていねいに対応してもらえる授業が多い。

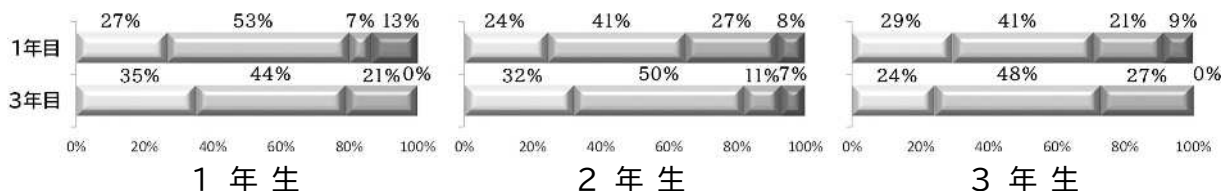
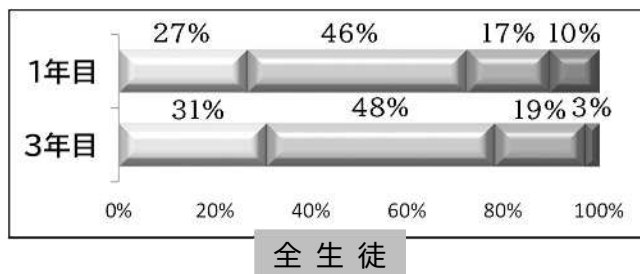
丁寧に対応してもらえていると感じている生徒の数が8割程度から9割程度まで増えている。これは、少人数制講座やチームティーチング、総合育成支援員の複数配置などによる成果であると考えられる。



設問10. 授業に興味を持てたり理解しやすくするための工夫(プロジェクタやタブレットの使用など)がされている授業が多い。

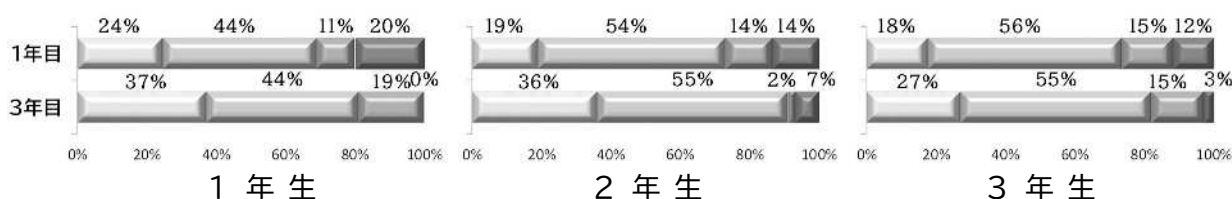
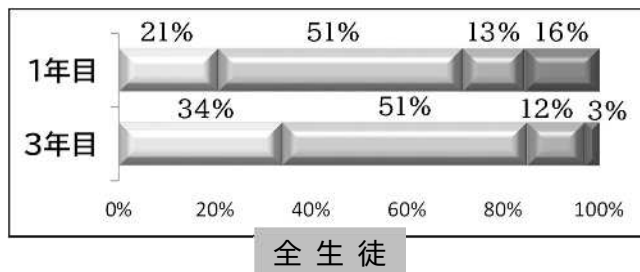
7割以上の生徒が工夫された授業が多いと感じている。

7割以上の生徒が工夫された授業が多いと感じている。タブレット (iPad)・プロジェクタ・電子黒板などを使用した視覚優位な授業が多く行われている結果と考える。



設問11. プロジェクタやタブレットの使用が授業の理解に役立っている。

全体的に視覚優位の授業が理解に役立っていると考えている生徒の数が7割程度から8割以上に増えている。このことは、3年間の比較でも顕著に表れている。

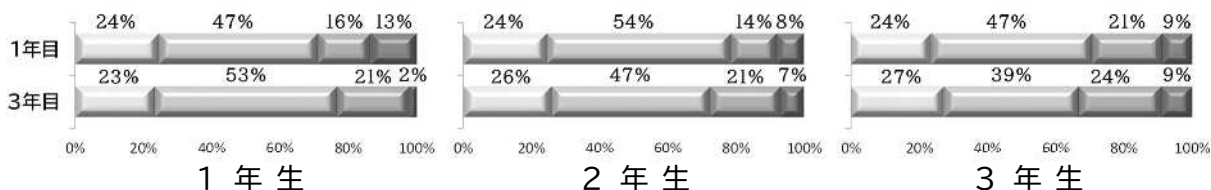
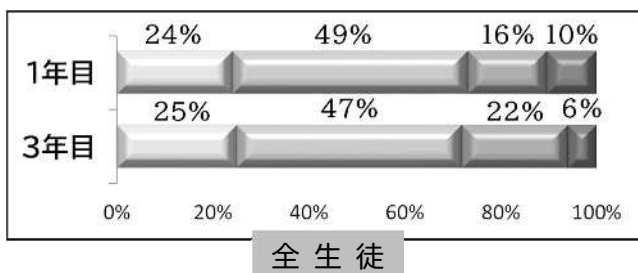


その思う
その思うほど
その思うより
その思うほど
その思うより
その思うほど
その思うより

設問12. 授業の内容を理解している。

全体では7割以上の生徒が授業の内容を理解している。授業でのさまざまな工夫や支援の結果であると考ええる。

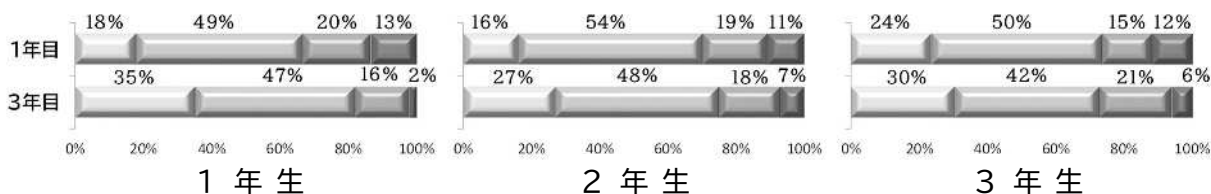
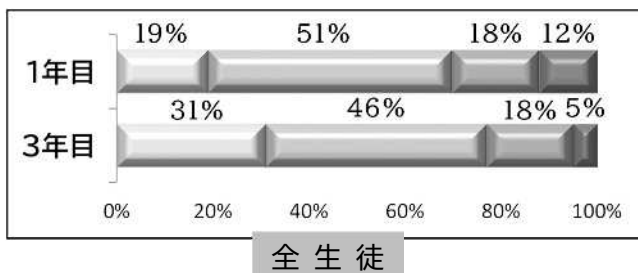
ただし、2年生・3年生においては、理解している生徒の割合が減少している。これは、授業の内容が難しくなっていくことが、その一因として考えられる。



設問13. 授業に満足している。

全体では7割以上の生徒が授業に満足している。

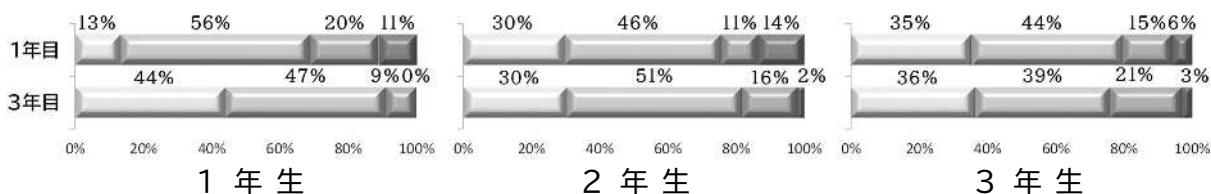
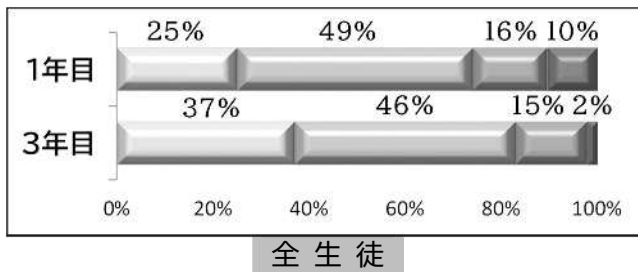
さらに、その中でも強い肯定感を持つ生徒が増加している。これも授業内容に関する様々な工夫された取組の成果であると考えられる。



設問14. 成績のつけ方がわかりやすい。

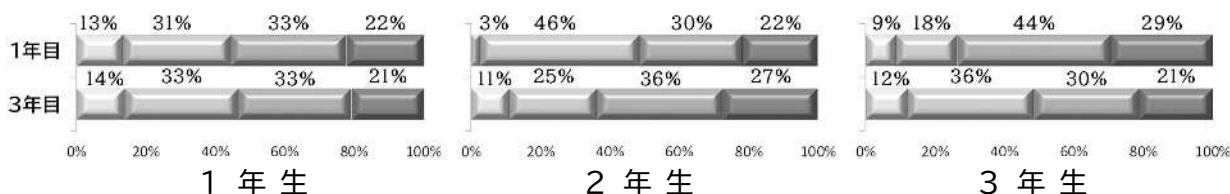
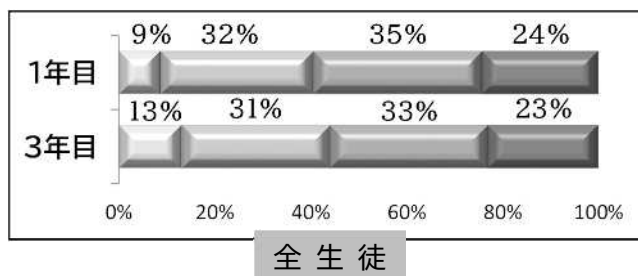
8割以上の生徒が成績のつけ方を理解し、納得している。

これも授業内容に関する様々な工夫された取組の成果であると考えられる。



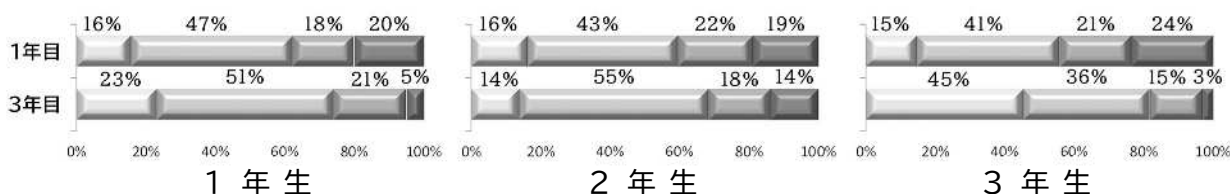
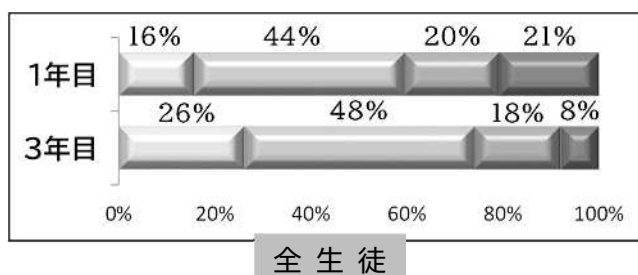
設問15. 自分から積極的に勉強するようになった。

全体では肯定意見が増加している。
しかし、半数以上の生徒は積極的に勉強に取り組むことができていない。そのような生徒に対し、原因を追究し、さらなる指導を行う必要がある。



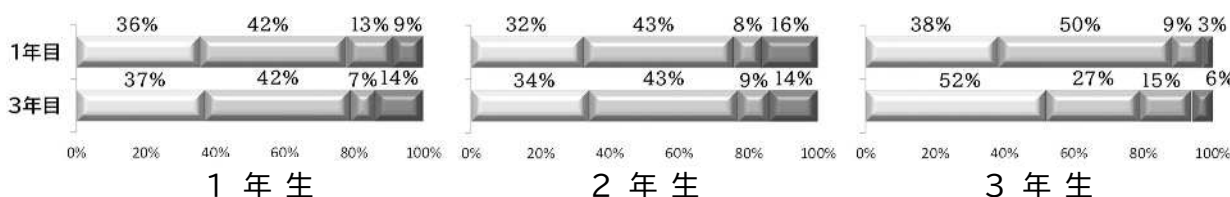
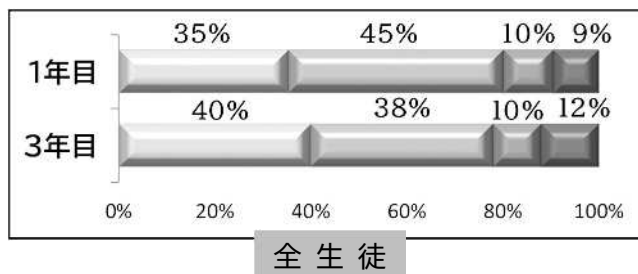
設問16. 先生やスクールカウンセラーに、相談しやすい雰囲気がある。

全体で、7割程度の生徒が相談しやすい関係を築けている。特に3年間の比較で見ると、3年生の後期（2回目）で強い肯定感を持つ生徒が非常に多くなっていることがわかる。進路や卒業後の不安に関する相談に対して、丁寧に対応している成果であると考えられる。



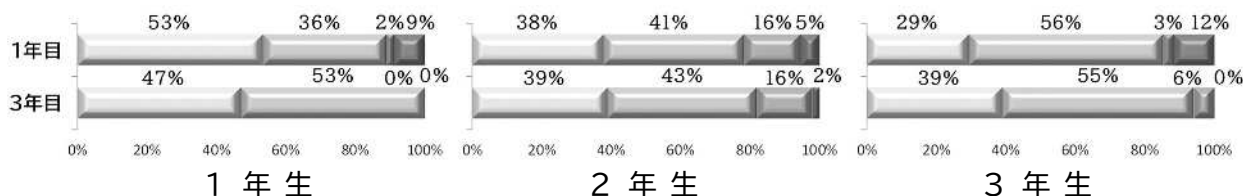
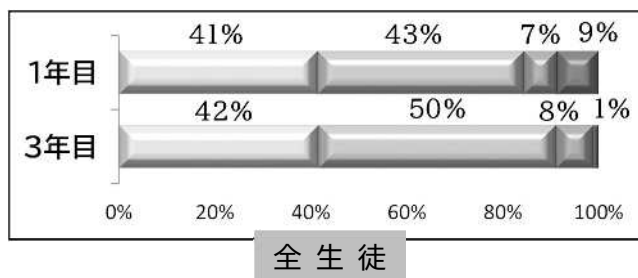
設問17. 友人関係がうまくいっている。

全体として8割程度の生徒が良好な友人関係が築けている。いずれの比較でも、強い肯定感が増えていることから友人関係の深まりがあると考えられる。



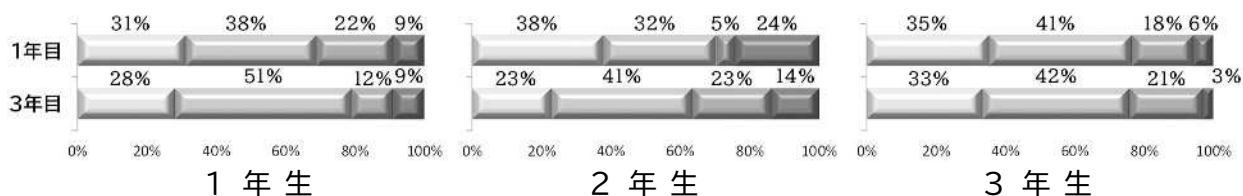
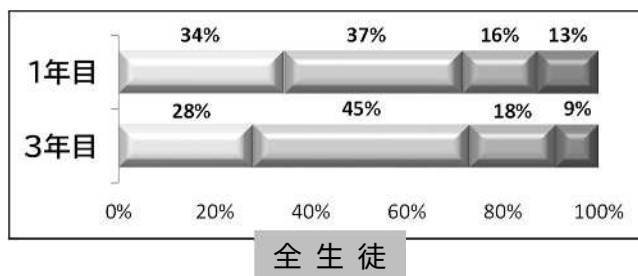
設問21. ルールやマナーを守って学校生活を送っている。

全体的に8割以上の生徒がルールやマナーを守って学校生活を送ることができている。特に1年生の後期では100%の生徒がルールやマナーを守っていると答えている。



設問22. 自分のことを大切にできている。

全体として7割以上の生徒が肯定感を持ち、生徒が自分自身を大切にできている。あとの3割弱の生徒には、自己肯定感の向上を促す適切な支援が必要であるとする。



生徒全体を通しての考察

- * グラフには直接反映されていないが、**設問1.～設問7.**に対して1つでも「強くそう思う」または「そう思う」という回答をしている生徒は何らかの『困り』を感じていると考えられる。そのような生徒が7割に達しているのが本校の現状である。この現状を踏まえ、今後も指導方法等を研究し支援を継続・改善していく必要がある。
- * 研究1年目の117名の回答で『困り』を感じている生徒が86名(73.5%)、感じていない生徒が31名(26.5%)。研究3年目の120名の回答で『困り』を感じている生徒が84名(70.0%)、感じていない生徒が36名(30.0%)。一見、『困り』を感じている生徒の割合が減っているようにも見て取れるが、『困り』を感じている生徒がその『困り』を解消できないまま、退学もしくは休学に至っているのではない。実際『困り』を感じていない生徒の実数は大きく増えていない。
- * 「書くこと」や「聞くこと」に対して『困り』を感じている生徒は増加している。こういった生徒の『困り』に対応できるよう、さらなる丁寧な指導が求められる。

* 半数以上の生徒が積極的に勉強できていないとの回答をしていることは、継続課題であるといえる。

* 学校生活を通して、自己肯定感の向上に関しては、本年度の1年生は改善傾向が見られるが、全体としてはあまり変化が見られない。このことは、自分自身に達成できる自信が持てないため、目標を定められない傾向にあると考えられる。次年度の3年生には早急に意識付けをし、2年生には、着実に目標達成に向けての取組を指導することが必要であるとする。

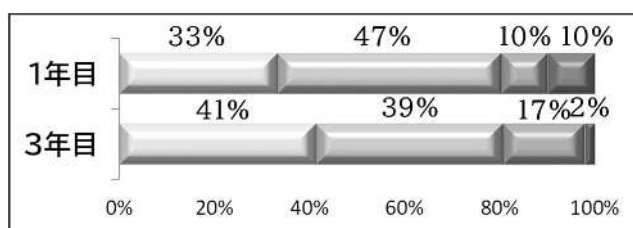
保護者対象アンケート

研究1年目 実施日：平成30年7月（回答数51/在籍数127）

研究3年目 実施日：令和2年12月（回答数82/在籍数124）

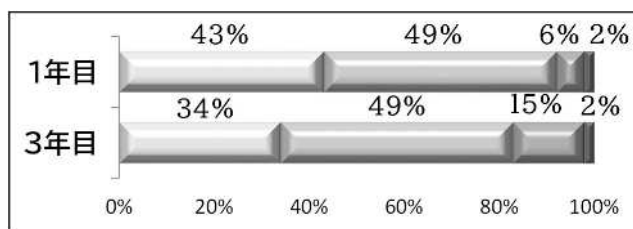
設問1. 授業に意欲的に取り組んでいる。

強い肯定意見が増加している。生徒が学校生活に慣れてきたこともあり、授業のことも興味や関心が向いてきたと感じる保護者が増えたのではいかと考える。



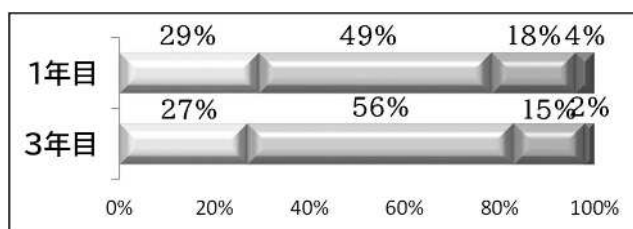
設問2. 教員は、お子様を理解し指導をしている。

8～9割程度の保護者が、教員は生徒を理解し、指導をしていると捉えている。残りの否定意見を持っている保護者には面談等で丁寧な対応が必要だと考える。



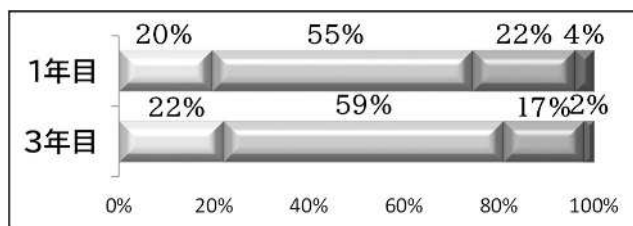
設問3. 授業の内容を理解している。

学習内容の進展に伴い、難易度が上がってきているが、授業の工夫・改善により、少しずつであるが、肯定意見が増えている。



設問4. 授業に満足している。

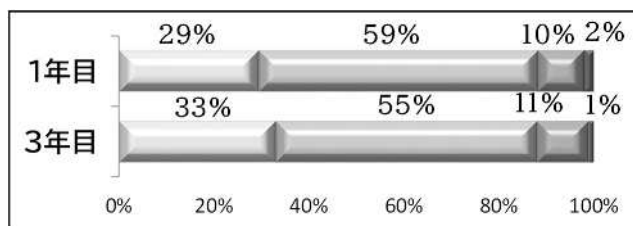
2割程度の保護者が、依然として生徒が授業に満足していないと感じている。このことから、さらなる丁寧な指導が求められていると考える。



そう思う
 そう思うけど心配
 そう思うけど心配ない
 そう思わない

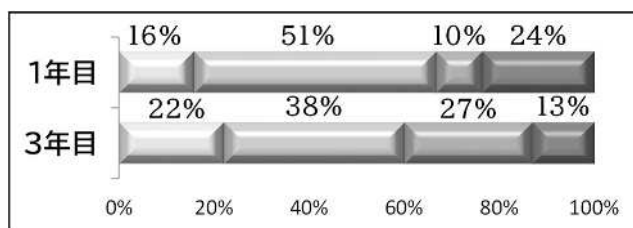
設問5. 教員は、お子様に成績のつけ方をわかりやすく説明できている。

多くの保護者が成績のつけ方を理解し、納得している。クラス担任が三者面談等で保護者にもわかりやすく説明できている結果ではないかと考える。このことから、学期ごとに行っている学年連絡会議で情報を共有することは有効である。



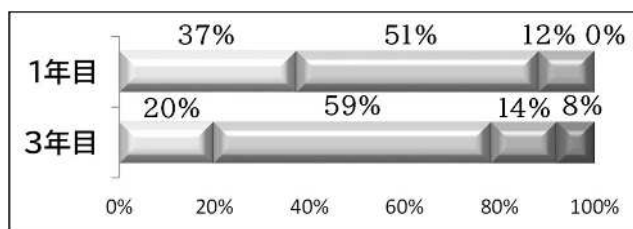
設問6. 積極的に勉強することができている。

半数以上の保護者は生徒が積極的に勉強していると捉えている。しかし、学校生活の慣れから、取り組む意欲をなくしていると感じる保護者が増えている。さらなる家庭学習等の指導が必要であると考えます。



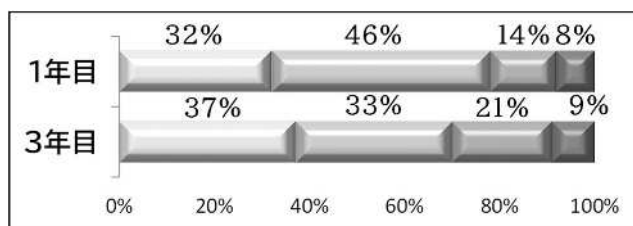
設問7. 教員やスクールカウンセラーに、相談しやすい雰囲気がある。

8割程度の保護者が教員やスクールカウンセラーに相談しやすいと感じている。ひとりひとりに寄り添って、親身に相談に乗ることができていることがうかがえる。



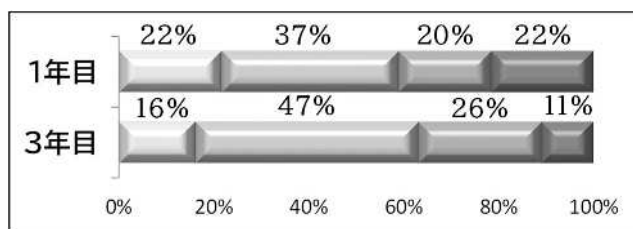
設問8. 友人関係がうまくいっている。

7割程度の保護者は生徒同士の友人関係がうまくいっていると感じている。保護者は生徒から様子を聴くことで判断していると思われる。生徒は学校生活の中で、上手く人との距離感を保っているが、時間経つと複雑な関係も出てくるのではないかと考える。



設問9. 日々、目標を持って学校生活を送っている。

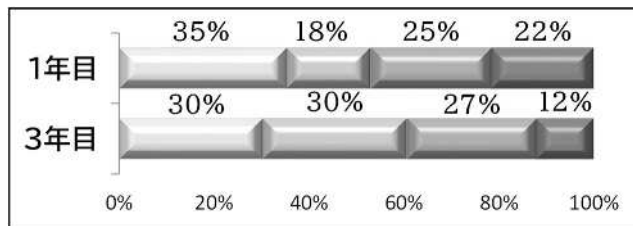
6割程度の保護者は、生徒が目標を持って学校生活を送っていると感じている。強い否定意見は減少しているが、あまり大きな変化は見られないことから、生徒の将来展望を開くような、さらなる日常の指導と進路指導が必要であると考えます。



その思い
その思い
その思い
その思い
その思い
その思い

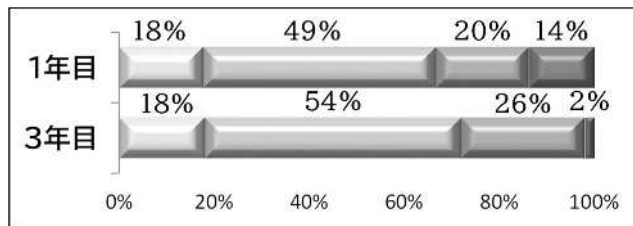
設問10. 卒業後の進路について考えることができています。

前問と同じことがうかがえる。また、生徒だけでなく保護者に対して、卒業後の進路についての情報提供をさらにわかりやすく伝える必要があるのではないかと考える。



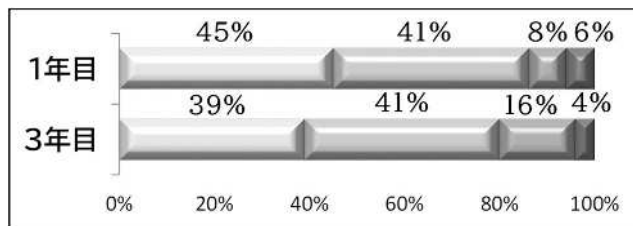
設問11. 学校生活を通して、問題を解決する能力がついている。

7割程度の保護者が、生徒が学校生活を通して問題を解決する能力が身についたと感じている。多岐にわたる身の回りの様々な問題に対して、生徒が対応していくのを、家庭でも見受けられたのではないかと考える。



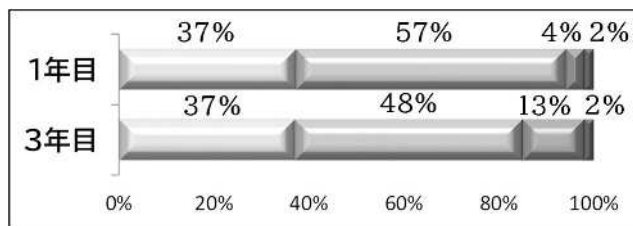
設問12. ルールやマナーを守って学校生活を送っている。

8割以上の保護者が、生徒はルールやマナーを守って学校生活を送っていると感じている。守れていない一部の生徒については、保護者と連携して指導することが必要だと考える。



設問13. 子どもに合った支援を受けられていると感じる。

9割程度の保護者が、それぞれの生徒に合った支援を受けられていると感じている。教員が生徒に対して行っている支援が、保護者にも適切に伝わっていることがうかがえる。支援が不適切だと捉えている保護者とは、連携を深め情報共有する必要があると考える。



保護者全体を通しての考察

- * 保護者対象のアンケートの回収率は、研究1年目は40%程度、研究3年目は66%程度と回収率を上げた。
- * 指導の工夫・改善を行い、授業に対する理解・満足度を少しずつ上げることができた。
- * 半数近くの保護者が、生徒が積極的に勉強に取り組めていないと感じている。そのように感じるのは、家庭学習での取り組み方で判断することが多いと考える。このことから、家庭学習への指導方法に工夫が必要である。本年度は、コロナ禍での課題を各教科で工夫して取り

組んで一定の成果があったと思われる。

- * 生徒の卒業後の進路について、学校での取組等が保護者に伝わっていないように感じる。保護者にも情報を提供できるようにしなければならないと考える。
- * 多くの項目において、概ね肯定意見は多いが、学校に対する期待感が大きく、数字的に厳しい評価が依然としてあり保護者との連携が重要課題として残っていると考える。

5. おわりに

以上、平成30年度より取り組んできた調査研究の「成果のまとめ」と「成果に対する評価」を記した。事前の計画通りにいかないことも多く、十分な成果をあげられなかった面もあるが、ここで一旦の区切りとしたい。

平成28年度からの2年間の取組を引き継ぎつつ、5年間にわたり研究してきた専門職（SC及びSSW）との協働は、教職員側の意識変化に伴い、ようやく実効性のある組織が運営できるようになってきたといえる。その中で、従来であればやむなく進路変更をしていったようなケースの生徒が卒業を果たしたり、残念ながら卒業には至らなかったが次のステージに進むにあたって手厚いサポートができたりと支援体制を充実させることができてきた。

また、多様なニーズのある生徒に対する学習指導方法とそれを補完する評価方法についても、不十分とはいえ、3年間の研究により一定の成果を見ることができた。学習指導方法に関しては普遍的な方法を確認することはできなかったが、一部の教室に設置された電子黒板や、複数の講座で並行して使用できる台数を整備したタブレット端末を使用することによって、授業におけるICT機器の活用が進んできたことが生徒の理解や取組姿勢の変化に繋がったといえる。特に、本年度開発に取り組んだ評価方法の工夫も『困り』を抱えた生徒のニーズに応える方策の端緒となるものであると考える。

しかし、このようないくつかの成果にも増して、学校がこの調査研究に取り組んでいることによって、教員の意識自体が変わってきたことが最大の成果といえるであろう。意識している場合はもちろん、無意識の内にも様々な配慮をするようになっていくことは学習指導方法の個々における改善に繋がり、評価方法の改善にも繋がっているといえる。

3年間の委託期間を終え、ここにまとめた成果は今後も本校の教育の柱となっていくものと考えている。しかし、京都市立高校における定時制の再編により、次年度より本校へ入学してくる生徒はいなくなる。予定されている残り2年の期間を終えると西京高校定時制はその歴史に幕を閉じることとなっている。この調査研究の成果にとどまらず、西京高校定時制が培ってきた“教育力”は、令和3年4月に開校を迎える単独の定時制高校である京都市立京都奏和高校に引き継がれ、さらなる発展を遂げることを願ってやまない。

末筆ながら、多くのご指導やご助言をいただきました多くの方々に感謝を申し上げ、本調査研究事業を終えたいと思う。

高等学校 個別の指導計画

プロフィールシート

ふりがな 生徒氏名					性別
生年月日	平成	年	月	日	年齢 歳
住 所					
保護者氏名					
作成年月日	年	月	日	最新改訂年月日	年 月 日

年 組 番	担任名	
年 組 番	担任名	
年 組 番	担任名	
年 組 番	担任名	

家庭状況

生活保護(要保護)	
就学援助(準要保護)	
要保護児童・生徒	
関 係 機 関	

家 族 構 成	
ひとり親家庭	
家 族 関 係 図	

家の様子
父の状況
母の状況
兄弟姉妹の状況
その他の関係者(祖父・祖母・叔父・叔母等)の状況

高等学校 個別の指導計画

健康状況	
身体的	
既往症	
持病	
アレルギー	
身体障がい	
精神的 / 知的	
検査日①	
検査機関①	
検査名・数値①	
診断名①	
検査日②	
検査機関②	
検査名・数値②	
診断名②	
通院中の医療機関	
医療機関①	
主治医①	
通院状況①	
医療機関②	
主治医②	
通院状況②	
所持している手帳等	
身体障害者手帳	種級
療育手帳	型
精神障害者保健福祉手帳	級
保護者と本人の障がいへの認識	
連携機関	
機関名	
支援内容	

生徒氏名

高等学校 個別の指導計画

入学までの在籍校(就学前施設含む)

①
②
③
④
⑤

欠席・遅刻日数

中学1年 欠席日数	中学2年 欠席日数	中学3年 欠席日数
日	日	日

欠席日数(日)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
高校1年													
高校2年													
高校3年													
高校4年													

遅刻・早退日数(日)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
高校1年													
高校2年													
高校3年													
高校4年													

本人の状況

生育歴(中学校入学までの状況)

--

高等学校 個別の指導計画

中学校における状況
学校生活における情報(本人の印象/気になる様子や行動の特徴/指導や支援の経過など)
学習面における情報(学力の程度/読み書き・計算/得意教科・不得意教科など)
対人関係における情報(言語コミュニケーション/友人関係など)
興味・関心の対象(趣味/部活動/地域での活動など)
現状についての思い・将来への希望
入学時保健室面談記録

個別の指導計画 1

氏名		性別		平成 年 月 日生(才)
クラス	年 組 番	担任		

生徒の実態(気になる具体的事項)		
学習面	得意 不得意 興味関心	
行動面	日常生活 運動制限 手先の動き	
社会性	対人関係 コミュニケーション	
健康面	診断名・服薬 アレルギー 食事制限	

合理的配慮等(保護者との合意形成)	
学校生活 学習・考査	
個別抽出指導 LD等通級指導	時間帯・時間数・内容

自立支援・キャリア形成			
他機関連携			
進路に関する 相談や見学	実施日	学校・事業所	内容

個別の指導計画 2

長期目標・願い(卒業時の姿・進路希望も含む)	
保護者	
本人	
指導者	

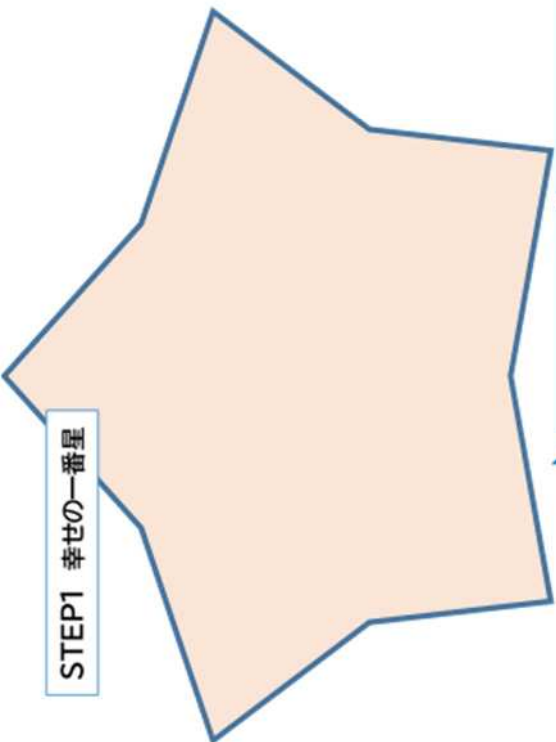
短期目標・願い(1年後の姿)			
	目標	具体的支援	変容・評価
保護者			
本人			
指導者			

学習面			
科目 (担当)	目標	取組内容 (配慮したこと)	変容・評価
国語総合 ()			

幸せの一番星シート
Planning Tomorrow with Hope
＜希望にみちた未来の計画＞

年 組 番 氏名 _____

STEP1 幸せの一番星



STEP2 ゴールを設定する

R 年 月 日

STEP5 近い将来の行動

R 年 月 日

STEP6 1か月後の作業

R 年 月 日

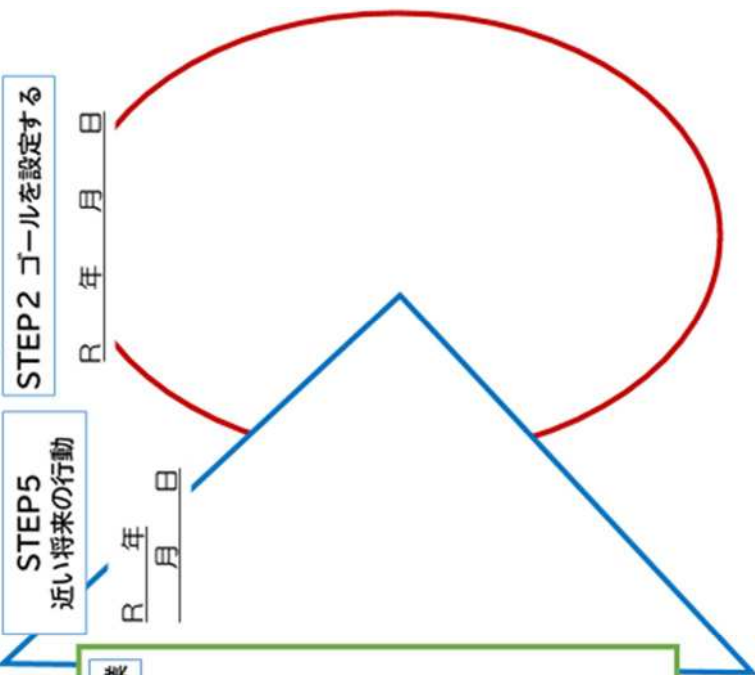
STEP7 最初の一歩

R 年 月 日

STEP4 必要な力/人

STEP3 今の自分

R 年 月 日



授業のチェックリスト

項目	番号	指導方法の内容	A	B	C
書く	1	プリント 記入欄に通し番号を振っている。			
	2	プリント フォントなど工夫している。(11~12ポイント・A3・罫線やマスの大きさ・余白など大きめのものになっている。)			
	3	ノート ノートの使い方を説明し、手本を示している。			
	4	ノート 前回のノートの書き終わりを確認し、前回欠席の場合などは必要な余白を確認している。			
話す	5	発問は、一問一答にするなど、答えやすいものになっている。			
	6	できるだけ、生徒が発話をする機会をつくっている。			
	7	全体の前で発表をするときには、自分の意見をまとめる用紙に前もって記入させている。			
聞く	8	授業や話の初めに、本時の単元目標など学習の流れを示して、話に見通しを持たせている。			
	9	ゆっくり、はっきり、大きな声で聴きとりやすく話している。話し出す前に、全体を話し手に注目させている。			
	10	生徒が話を始める前に、他の生徒に聞く体勢をつくらせている。安心して話せる場をつくっている。			
切り替え	11	授業の準備状況を確認している。			
	12	本日のテーマや目標(や教科書のページや月日など)を、授業の初めに書いている。			
	13	話を聞く場面と問題を解く(あるいは板書を写す)場面の区別を明確にしている。			
	14	活動の切り替わる時を明確にしている。(始業時に挨拶をしている。タイマーを使用している。など)			
時間の管理	15	実習や実験で、作業行程表をつくり、行動と時間を細かく具体的にしている。役割分担を決めている。			
	16	宿題は課題の量と形式を工夫し、提出物の期限を決めて伝えている。自分でそれまでの準備を計画させている。			
	17	終わりの段階を示している。(考査の範囲を伝える。本時の目標を伝えている。)片付けも含めて計画させている。			
物の管理	18	授業プリントにファイリング用の穴をあけている。授業プリントにナンバーを記入して。			
	19	ノートに貼るプリントは貼ることがわかるように明示している。ノートサイズよりやや小さめに切って配布している。			
	20	教室に籠を準備することや、物に番号を振ったりカラーテープをつけたりして、片付け完了を一目瞭然にしている。			

- A⇒これまでの状況 … ○：意識有
△：知ってはいたが、意識していない(授業には適さないので、取り組めない)
×：意識無し
- B⇒これからの取組 … ○：実施→授業準備や授業中に意識してみる
×：不実施→この授業には適さないので、取り組めない(取り組まない)
- C⇒実施項目の結果 … ○：意識していた
△：期間の半分ほどは意識できていなかった
×：意識できなかった

学習状況のチェック表

教科担当 _____ 先生

下記の ①～⑪ それぞれについて、該当する数字を記入してください。

1：できていない 2：どちらともいえない 3：できている

	年									
	組	番	組	番	組	番	組	番	組	番
	名前		名前		名前		名前		名前	
① 板書された内容をノートやプリントに書きとることができる。										
② 教員の話や指示をしっかりと聞いている。										
③ 提出物をきちんと出すことができる。										
④ 同じ質問を繰り返したり、何度も聞き返したりせず、聞くことができる。										
⑤ 1つのことにこだわっても（興味を持って）、時間の切り替えがうまくできる。										
⑥ 授業等の直前に時間割や学習場所が変更になっても対応できる。										
⑦ 具体的に指示されたことだけでなく、自分で計画を立てることもできる。										
⑧ 整理整頓ができて、物の管理ができる。										
⑨ 準備や片付けに時間をかけず、要領よくできる。										
⑩ 質問の意図に応じた発表(発言)ができる。										
⑪ 自分から質問をしたときに、相手の回答を待ってから次の話題に替えられる。										

My Guidepost

	5	4	3	2	1
学習への動機	<input type="checkbox"/> 授業に出席できている。 <input type="checkbox"/> 自己目標が書けている。 <input type="checkbox"/> 自己目標に向けて努力し、達成できた。	<input type="checkbox"/> 授業に出席できている。 <input type="checkbox"/> 自己目標が書けている。 <input type="checkbox"/> 自己目標に向かって努力し、努力している。	<input type="checkbox"/> 授業に出席できている。 <input type="checkbox"/> 自己目標が書けている。	<input type="checkbox"/> 授業に出席できている。 <input type="checkbox"/> 自己目標が書けていない。	<input type="checkbox"/> 欠席や遅刻が多い。
学習する準備	<input type="checkbox"/> 毎時間、授業が始まるまでに、余裕を持ち、着席している。 <input type="checkbox"/> 必要なもの（筆記用具・教科書・ファイルなど）を持ってきている。	<input type="checkbox"/> 授業が始まるまでに、余裕を持ち、着席することが多い。 <input type="checkbox"/> 必要なもの（筆記用具・教科書・ファイルなど）を持ってきている。	<input type="checkbox"/> 授業開始に遅れずに着席している。 <input type="checkbox"/> 必要なもの（筆記用具・教科書・ファイルなど）を持ってきている。	<input type="checkbox"/> 授業開始に遅れずに着席している。 <input type="checkbox"/> 必要なもの（筆記用具・教科書・ファイルなど）を持ってきている。	<input type="checkbox"/> 授業開始の挨拶に間に合わないことが多い。 <input type="checkbox"/> 必要なもの（筆記用具・教科書・ファイル等）を持ってきていない。
授業への集中	<input type="checkbox"/> 授業の大半、先生の話聞いています。 <input type="checkbox"/> 発問に回答ができる。 <input type="checkbox"/> 自分にとって必要なことを、プリントの余白にメモを取ることができている。	<input type="checkbox"/> 授業の大半、先生の話聞いています。 <input type="checkbox"/> 発問に回答ができる。	<input type="checkbox"/> 授業の大半、先生の話聞いています。	<input type="checkbox"/> 授業の半分程度は先生の話聞いていますが、途中で集中が途切れることが多い。	<input type="checkbox"/> 机に伏せるなど、授業に参加していません。
課題への取組	<input type="checkbox"/> 授業中にプリントへの記入ができている。 <input type="checkbox"/> 自主的に学習している。（ロイロの活用など） <input type="checkbox"/> ペアワークやグループワークに積極的に参加しようとしている。	<input type="checkbox"/> 授業中にプリントへの記入ができている。 <input type="checkbox"/> ペアワークやグループワークに積極的に参加しようとしている。	<input type="checkbox"/> プリントへの記入ができている。 <input type="checkbox"/> ペアワークやグループワークに参加しようとしている。	<input type="checkbox"/> プリントへの記入が不十分なものが多い。 <input type="checkbox"/> ペアワークやグループワークに参加できていないことが多い。（私語が多いなど）	<input type="checkbox"/> プリントへの記入が不十分である。 <input type="checkbox"/> ペアワークやグループワークに参加できていない。
振り返りや活用	<input type="checkbox"/> 自己目標マップに振り返りを記入できている。 <input type="checkbox"/> 自己目標マップの目標を達成するために、改善することができている。	<input type="checkbox"/> 自己目標マップに振り返りを記入できている。 <input type="checkbox"/> 自己目標マップの目標を達成するために、課題を見つけていることができる。	<input type="checkbox"/> 自己目標マップに授業の振り返りを記入できている。	<input type="checkbox"/> 自己目標マップの頑張り度（1～6）を記入している。	<input type="checkbox"/> 自己目標マップに振り返りを記入できていない。

2年 組 番 名前

自己目標マップ

科目	C 英語 I
----	--------

2年	組	番号	名前
----	---	----	----

1 学期を振り返ってみよう！

できるようになったこと

反省していること

2 学期中間調査までの目標

① ひとつひとつの授業を大切にす。

② 教科書の本文の一部を相手に伝わるように正確に音読することができる。

③ 助動詞・進行形・be動詞や一般動詞の過去形を用いて表現することができる。

2 学期中間調査までの自己目標と そのために自分自身ができる行動

自己目標：

そのためにできる行動

①

②

③

↓ ↓ 調査まで残りの授業回数	□	□	□	□	□	今日の1番の学び
17 月 日 ()	1	2	3	4	5	
16 月 日 ()	1	2	3	4	5	
15 月 日 ()	1	2	3	4	5	
14 月 日 ()	1	2	3	4	5	
13 月 日 ()	1	2	3	4	5	
12 月 日 ()	1	2	3	4	5	
11 月 日 ()	1	2	3	4	5	
10 月 日 ()	1	2	3	4	5	
9 月 日 ()	1	2	3	4	5	
8 月 日 ()	1	2	3	4	5	
7 月 日 ()	1	2	3	4	5	
6 月 日 ()	1	2	3	4	5	
5 月 日 ()	1	2	3	4	5	
4 月 日 ()	1	2	3	4	5	
3 月 日 ()	1	2	3	4	5	
2 月 日 ()	1	2	3	4	5	
1 月 日 ()	1	2	3	4	5	
0 月 日 ()	2 学期中間調査					

令和元年度 文部科学省委託事業

「多様性への対応に関する調査研究事業」

スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーと協働し、
個々の生徒の学習ニーズに応じた指導方法の確立

～社会でより良く生きていく力をつけるために～

報告書（最終年次）

令和3年3月発行

発行者 京都市立西京高等学校 定時制
京都市中京区西ノ京東中合町1
電話（075）841-1240

編集者 研究指定実行委員会

印刷・製本 株式会社 大気堂